三島勤労者山岳会20周年記念海外山行

ヨーロッパアルプス

後藤　隆徳

(1) はじめに

会として、海外登山の夢はいつか実現したかったが、ここ数年の北アルプス冬山実績と会創立20周年を考え、91年がタイムリーと判断し、第17回定期総会において「ヨーロッパ・アルプス＝モン・ブラン（4807m）」のアドバルーンを掲げ、これを「三島勤労者山岳会創立20周年記念海外山行」と決定した。

登山対象の山の選定にあたっては、時間も資金も少ない我々勤労者にとって、最も短期間で有利に登れる富士山以上の高峰、かつ将来6～7千m級の山に挑む場合、高度順化が効果的な標高を有する山を選んだ。

あわせて、この山行を会全体のものにする意味で、ハイキング志向者にも、美しい山々、花、湖など楽しめるトレッキング隊を用意し、全会員が取組むことの出来るプランとした。

(2) 隊員の選出

参加の希望は、全会員、会友を対象にし、例外的に東部ブロックに所属する会の会員で、三島労山の山行に数多く参加している者も検討した。理由は、過去にも一定の条件を満たし、他労山会員が合宿に参加した経緯もあるうえ、果して三島労山でどの程度参加者があるか分からず、最悪の場合、合同隊も考えたからだ。

結果的には、部内で6名の参加の意志表示があったものの、1名は理由不明のまま不参加となり、部外では、沼津労山1名、富士希更山の会1名の打診はあったが、結局不参加となり、最終的に4月、女性1名を含む登山隊のみ5名の参加が決定した。

(3) 参加隊員と山歴

1. 隊長　毛利哲也（58）登山歴18年、冬山18年。85年冬横尾尾根、88年冬北鎌尾根、90年冬剣岳早月尾根。
2. CL　後藤隆徳（44）登山歴26年、冬山24年。86年冬中崎尾根、87年冬涸沢岳西尾根、88年冬北鎌尾根、90年冬剣岳早月尾根。
3. 装備　山田　茂（47）登山歴9年、冬山8年。86年冬中崎尾根、87年冬涸沢岳西尾根、88年冬北鎌尾根、90年冬剣岳早月尾根。
4. 食料　中田　明（30）登山歴12年、冬山8年。85年冬横尾尾根、
5. 会計　村松美喜代（42）登山歴7年、冬山1年。90年春奥大日岳、91年春奥穂高岳。

(4) 行動予定

別表に掲げた。

(5) 遠征概要

①渡航のことなど

旅行窓口は、東京の「イーストコーポレーション株式会社」を利用した。この会社は毎月「登山時報」で広告を取扱っているうえ、社長の武川は労山通と聞き決めた。昨年、マッターホルンに登った会員の渡辺昭二も同社を使っている。まず決定すべき事は遠征期間で、これは休暇取得の問題が絡み各自家庭、職場で頭の痛い日が続き、全員同じ日程を取得出来ない場合は、短期隊と長期隊に分かれ、現地で合流し、帰国は一緒にとの案も浮上した事もあった。

しかし、旅行費用は、10～17日間でも変わらないうえ、往復するだけで4日間も費やし、思った程登山期間を確保出来ないことを考慮して、7月30日～8月15日の17日間で合意された。

この件で一番苦労したのは、主婦である村松と思われるが、月並の表現で恐縮だが、家庭の理解、協力、援助がなければ実現は難かしかったのではないかと思う。

イースト社のツアーは2通りあり、ひとつは17日間でモン・ブランとマッターホルンをガイド付きで登り、宿泊はホテルを利用するもの。費用は約80万円。一方は、全日程フリーで宿泊は自分でホテルを探しても、テント泊でも自由なもので費用は約37万円。

我々は当初前者を考えたが、交渉の段階で、㋑必ずガイドが同行する条件のような感じがするが、約款では必ずしもそうでなく、過去のツアーのマッターホルンでガイド不足で用意出来ず紛糾した事実を聞いた。㋺ガイドレス登山で苦労してこそ価値ある本当の登山

NO	日時	曜	登山する山	行程
1	7／30	(火)		三島～東京～成田(集合 9:30ごろ) 成田発 11:30予定 チューリッヒ着午後
2	／31	(水)		チューリッヒ発午前専用バスでシャモニ着午後 シャモニよりタクシーで、レ・ロジェールキャンプ場へ
3	8／1	(木)	トゥール・ロンド（3792m）	BC～ミディ始発ロープウエイ～ミディ～エルブロネル～トリノ小屋～アントレーブのコル～頂上～エルブロネル～BC
4	／2	(金)	モン・ブラン（４８０７ｍ）	BC～ニュー・デークル～グーテ小屋
5	／3	(土)	〃	グーテ小屋～頂上～BC
6	／4	(日)	休養日（モン・ブラン予備日）	(シャモニの気のきいたレストランでディナーなんてグー)
7	／5	(月)	ミディ（３８４２ｍ）～プラン針峰（３６７３ｍ）縦走	BC～ミディ～プランのコル～プラン頂上～プランのコル～ルカン小屋
8	／6	(火)	〃	ルカン小屋～モンタンヴェール～シャモニ
9	／7	(水)	移動日	シャモニ午前～ツェルマット午後(専用バスにて) ツェルマット着後・・・キャンプ場
10	／8	(木)	マッターホルン（４４７８ｍ）	ツェルマット～フリー～シュヴァルゼー～ヘルンリ小屋
11	／9	(金)	〃	ヘルンリ小屋～ソルヴェイ小屋～頂上～ツェルマット
12	／10	(土)	休養日（マッターホルン予備日）	(ツェルマットのうまいワインを飲む)
13	／11	(日)	ブライトホルン（４１６４ｍ）	ツェルマット～クライン・マッターホルン駅～頂上～ツェルマット
14	／12	(月)	予備日またはハイキング	全員でハイキングを楽しむ
15	／13	(火)		ツェルマット午前発(専用バスにて) チューリッヒ着午後・・・ホテル泊
16	／14	(水)		チューリッヒ発午前
17	／15	(木)		成田着後～東京～三島(解散)

[redacted] 91/06/27

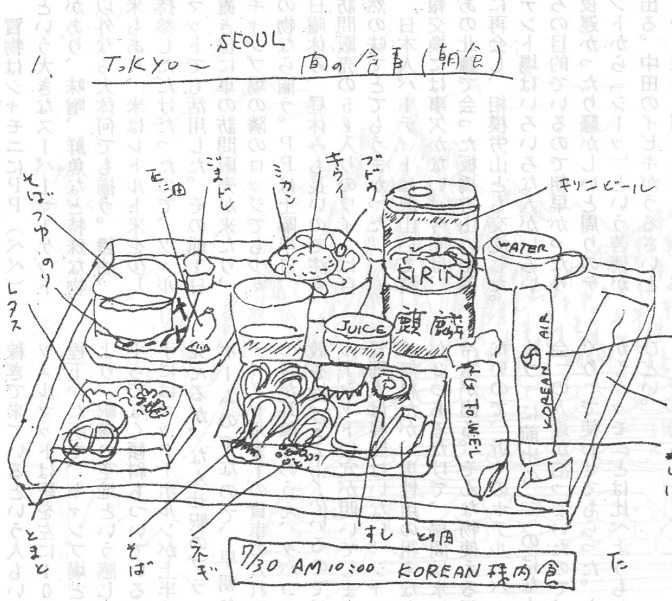
ハイキング	宿　泊	使用交通機関	料　　金	備　　考
	機　内			食料、装備調達 グーテ小屋予約
	B　C	シャモニ～ミディ～エルブロネル(ロープウエイ、往復)	174Fr　4350円 1Fr=25円として	エルブロネル～頂上 4H 下り　3H
	グーテ小屋	シャモニ～ニューデーグル (登山電車、片道1H)	89Fr　2225円	登り6H
	B　C		〃	
	B　C			
モンタンベール～ブラン・ド・レボーユのハイク　4H	ルカン小屋	シャモニ～ミディ 始 6:00	114Fr　2850円	ルカン小屋（アルプスで最高の小屋）
アンデックス～ラック・ブラン～ブランブラのハイク　5H	B　C	モンタンヴール～シャモニ	46Fr　1150円	荷物整理
	B　C			食料、装備調達
	ヘルンリ小屋	ツェルマット～フーリ、フーリ～シュヴァルッセー　22Fr 往復　1SFr=100円として	2200円	出発　4：30 夜明け　5：00 ソルヴェイ小屋で最終判断する
	B　C			
	B　C			
	B　C	ツェルマット～クライン・マッターホルン　42SFr4200円		
スネガ～オーバーロートホルンのハイク	B　C			打ち上げパーティー
	ホテル			
	機　内			
			423Fr　10575円 66SFr　6600円	

出発日
新幹線・三島駅

ザックが凄い

といえる。㈦登る山に制約がある。㈧料金が高く、食事代など加算すると百万円以上になる。㈨テント泊は気軽にいろいろの人と交流出来る、などの理由で後者のフリーツアーを申込んだ。

フリーツアー代金に含まれるのは、東京～チューリッヒ往復チケット、チューリッヒ着日、発日のホテル、チューリッヒ～シャモニ～ツェルマット移動の専用バスであり、成田のホテルは別料金である。



テント泊で大変なのは何といってもその荷物の重量で、山の装備の他に、下界の生活用品、若干の食料も加わると30kgと冬山並みで、移動に苦労したが、本来ホテル泊ツアー者のものだった移動専用バスを交渉して使わせてもらいだいぶ楽になった。

北海道から参加したフリーの2人は、往路荷物を送ったようだが、指定場所へ受取りに行かなければならず時間のロスもあったようだ。その点、ツェルマットで会った大阪府連の「このはな山の会」のパーティーのように、安い素泊りのホテル利用も一方だが、これには事前の調査、知識、語学力が必要になる。

旅慣れた話せる人は、当日最寄りの駅から電話で交渉するようだ。ツェルマットの駅には、市内のホテルの場所、星数、料金、電話番号の掲示板があるし、シャモニにも安いスキー宿があると聞いた。安く、快適な旅行を楽しむには、やはりそれなりの「実力」が必要なのである。

なお、渡航のチケットは格安のものもあるが、希望日通り取れず、日程に余裕のない人は無理である。

②キャンプ場

シャモニは街から1・5km、20分にある大きな国立キャンプ・ロジェール。近くに氷河の水を集め白く濁るヴーブ川が流れ、右にモン・ブラン、中央にシャモニ針峰群、左にドリュを望める最高の場所。オートキャンプ場を兼ねているので、日本とは違う牽引式のキャンピングカーが多く、ナンバーを見るとドイツ、イタリヤあたりからも来ている。申込みは入口左の事務所2Fで行い番号札を渡され、清算は引き払う前日となる。ガスボンベも借りれる。大と小があり、我々は小にしたが、帰る時まだ残っていたので隣の日本人にあげてきた。設備は国立だけあり立派に整っていて、無料で24H使える温水シャワー、極めて清潔なトイレ、有料だが地下には、洗濯機と乾燥機がある。

テント場は芝生で気持良い。出来れば木陰に張りたい。朝夕はセーターが欲しい位涼しいが、日中はかなり暑いからだ。ブルーシートが有効で、夕立、朝ツユから守ってくれる。

買物はシャモニにPP（ペペ）という大きなスーパーマーケットがあり、味噌、鮮魚など特殊な物以外なら大体何でも揃う。醤油、米もあり、米はレトルト米を少し持参しただけだったので、ツェルマットでも活用した。その他1日置き位に車の訪問販売が来たり、キャンプ場の隣のロッジでも少々の物なら揃う。PPは土曜半日、日曜休み、昼休みも長いので注意。訪問販売の5ℓ入りのワインは自然の味でとてもうまかった。

日本人パーティーは沢山いて情報交換には事欠かない。今回は、あの北鎌で会った板橋労山の山岡に再会し、相模労山とも交流した。テント場はいろいろな人がいろいろの目的でいるので朝早かったり、夜遅かったり騒がしいと周りのテントから「シーッ」という苦情が出る。中田のイビキがうるさいと言って来た外国人もいたようだ。また、山で疲れた帰りとか買出しで荷物が多い時は駅からタクシーを利用した。ライトバンで荷物が積み易い様になっている。料金は70FF（1700円）位だが、荷物が多いと荷物料も取られる。女性の運転手もいたが、英語が全く通じなかったり、中東の方から出稼ぎで来ているという人もいた。ツェルマットは駅を左に100m程下った所で、キャンプ場というより、駅横の空地という感じで、平らでなく傾斜もついている。左手にはマッターホルンが上半分位見えるが、なんせ駅のプラットホームの下なので、早朝などディーゼルカーの貨車の入れ換えの音が耳障りのうえ、タバコの吸殻を投げるヤツがいるので、ブルーシートに穴が明いてしまった。管理人は昼間はいない。シャワーは無料だが、男性用の粗末なものが2つあるだけで、昼間は氷河の冷水が出る。そんな物使える訳はないので、近くのホテル「バーンホフ」に前出の「このはな山の会」の人達が泊っていたので、「もぐり」で使わせてもらった。とにかくシャモニとは比べようもなくひどい。

買物は駅前にコープがあり、大体何でも揃う。スイスには高いが鮮魚もあり、一度はトラウトのバター焼なども食べた。燃料は、スポーツ店でEPIボンベを捜したが、仲々見つからず、10軒程回って最後の店にようやくあった。燃料は飛行機で運搬出来ないので、良く研究していかないと、高い買物を強いられことになる。

③山について

高い所では、軟らかい新雪の下はガジガジの硬い氷である。モン・ブランの最後の登りなど雪稜というより氷稜と表現した方が適当だろう。行動はほとんどコンテニアスだから、滑落すると確保は難しくなる。ミディ～プラン、モンテ・ローザでは部分的にスタカットで行動した。

気温は晴れていれば、風がないかぎり、5月の北アルプスより暖かい。ミディ～プランの時は無風状態だったので非常に暑かった。モン・ブランでは快晴だったが、風があったので、オーバーズボンを使用しなかった毛利、村松はだいぶ寒かったようだ。出発時、小屋の中が暖かいだけに、適切な判断をし、途中寒かったら無理してはいけない。

また、標識、赤布などは日本の山のように分岐、山頂等に全くなく、早朝暗いうち出発する時、悪天候で見通しの利かない場合などは、十分に地形の把握が必要になる。モン・ブランなど山頂が分らない時があるようだが、この様な場合は高度計で判断するしかない。地図も2万5千分の1を見ても、氷河と針峰が多いので、等高線も明瞭でなく、実際とかなりイメージが違うので戸惑う。

ルートはガイドブックにも詳しく記載がなく、ミディ～プランのロニョンの懸垂下降、モンテ・ローザの頂上付近の岩稜など予想外だった。細かい情報の収集も必要である。ロニョンの懸垂については、会友の香取は、自分達の時は「やらなかった」「なかった」と証言しているので、別のルートがあるか、雪の量が多かったかである。また、氷河の登行下降が多いので、必ずアンザイレンが必要で、暗い時通り分らなかったクレバスも、明るい時通るとその多さに驚く。特に午後になると雪がゆるみ、モンテ・ローザ氷河では、片足だが、股まで何回も落ち、生きた心地がしなかった。毛利、中田はここをノーザイルで下り、ガイドに注意されたそうだが、非常に危険なことだ。

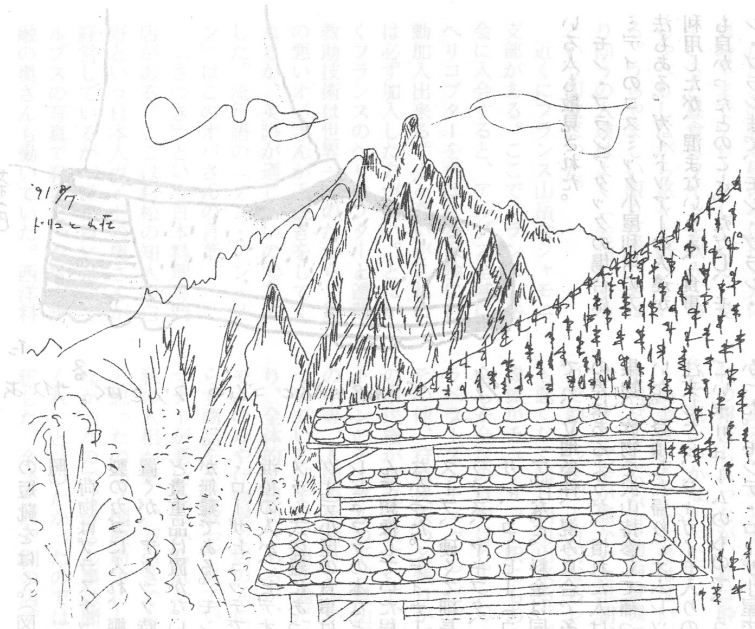
山はスケールが大きく、ちょっとした日帰りコースでも10H以上はかかる。そのためか、とにかく向うの人は休憩をしないで歩く。標高差1800mのモンテ・ローザの場合、早い人だと、小屋を2時頃出発し、昼頃帰り、15時にはツェルマットに着く。強靭な体力と卓越した技術、的確な判断力が要求され、早出早着でスピーディーな行動、イコール「安全登山」の思想である。

④高度の影響

出発前に一番心配したのがこれだった。主な高所トレーニングは7月に富士山頂上で1泊しただけだったが、結果的には全員快調で、食欲不振、倦怠、気力減退等はみられなかった。ただし、4000mを越えるとさすがに速く登れず苦しく、あせらずゆっくり確実にとなる。むしろ疲れの主な原因は、不慣れな環境の小屋泊りによる睡眠不足が、他は日本の木造の小屋と違いガッチリした石造りで収容人員は2～300人位の大きなもの。電話もあり、飲み物、食べ物はかなり揃っているが、メニューが読めないものもあり、思うように注文

積み易い様になっている。料金は70FF（1700円）位だが、荷物が多いと荷物料も取られる。女性の運転手もいたが、英語が全く通じなかったり、中東の方から出

時頃出発し、昼頃帰り、15時にはツェルマットに着く。強靭な体力と卓越した技術、的確な判断力が要求され、早出早着でスピーディーな行動、イコール「安全登山」の思想である。



④高度の影響

出発前に一番心配したのがこれだった。主な高所トレーニングは7月に富士山頂上で1泊しただけだったが、結果的には全員快調で、食欲不振、嘔吐、目まい、激しい倦退、気力減退等はみられなかった。ただし、4000mを越えるとさすがに速く登れず苦しく、あせらずゆっくり確実にとなる。

むしろ疲れの主な原因は、不慣れな環境の小屋泊りによる睡眠不足で、可能ならば食事だけ小屋でとり、テント泊のが静かに休養出来ると思う。もっとも、モン・ブランのグーテ小屋などは、富士山と同標高なのでそれが休めない一因といえるのだが。

ガイドの話として、むしろ高所では下りに呼吸回数が減り、酸素の摂取量が減少して影響が出る場合があるので、下りでも意識的に呼吸を多くした方が良いとの事だった。ガイドツアーに参加した45歳の岡山の女性は、出発前富士山にも登らなかったが何でもなかった様子だ。体調、個人差ももちろんある。

⑤山小屋について

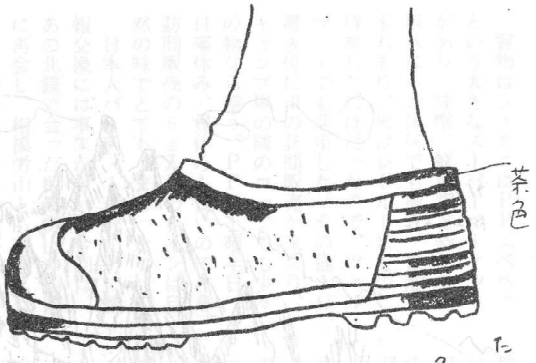
グーテ小屋（モン・ブラン、1泊）、ルカン小屋（ミディ～プラン、外で休憩）、ベルンリ小屋（マッターホルン、内で休憩、食事）、モンテ・ローザヒュッテ（モンテ・ローザ、2泊）を利用した。

グーテ小屋はジェラルミン製だが、他は日本の木造の小屋と違いガッチリした石造りで収容人員は2～300人位の大きなもの。電話もあり、飲み物、食べ物はかなり揃っているが、メニューが読めないものもあり、思うように注文出来ないのは、街と同じで残念。

グーテ小屋を利用する場合、8月は非常に混むので、日本を出発する前、早い時期にシャモニの「スネル・スポーツ」の神田泰夫に予約を依頼した方が良い。我々が頼みに行った時、すでに8月はいっぱいでとれなかった。

予約なしで泊る場合は、1番の登山電車で登り、遅くとも14時頃まで小屋に着き、キャンセル待ちを入れる。取れれば18時の夕食の後、ベッドを指定してくれる。予約の場合は、着き次第、一番疲れているこの時間帯に、夕食までの間ベッドで休めるのでかなり有利である。

ベッドなしの場合は、泊めてはくれるが悲惨で、食堂、廊下、階段等でまどろむしかない。15時頃着の人でもとれない人がいたようだ。小屋は遅くまで騒がしいうえ、22時頃まで明るいので、睡眠不足になりがちで、翌日2時起床の体にはこたえる。外でビバークして



の短靴をはく。（図参照）

荷物はプラスチック製のカゴに入れ、棚に置くが、アタック時など貴重品は置かない方が無難である。モンテ・ローザヒュッテでは、浜松の人が、ビデオカメラ一式盗難にあった。グーテ小屋の食事は、レビュファの本など読んで想像していた程でなかった。ディナーはスープ、硬くて細長いライス、ヤキブタ、プリン、コーヒー（ココア）など。料金は同じ飲物位。皆さんあんなもので良く動き回る。

トイレは、形はいろいろだが基本的には同じようで、日本人には大変やりにくい形だ。グーテ小屋の場合絶壁の上にちょこんと乗った恐ろしい所で、時々落ちる人もいる様だ。2つしかないので朝など要領良くやらないと待たされる。屋根にフックがついてるが、汚物はオフにトイレごとヘリで降す様だ。ちなみにスイスでは全てこの方式と聞いた。なお、フランス山岳会に入会すると小屋代は半額、ロープウェイ、小屋で買う水（お湯）など割引きの特典がある。

モンテ・ローザ小屋は余程の事がない限り予約なしでも泊まれる。ただし、標高が低く頂上までの標高差1800mは非常に厳しい。小屋までは午前中に着く位短いので、テントを持参し、モンテ・ローザ氷河に幕営した方がゆっくり静かに休めるうえ、翌日も有利に展開する。頂上付近の岩場は混雑すると動きがとれないので早い時間に通過したい。我々は予備知識がなく分からなかった。

小屋番はドイツ系の人で英語は全く通ぜず、少し分かる娘がドイツ語に訳して話す。村松が一時行方不明になった時は閉口した。ちなみにスイスは母国語がなく、ドイツ語を話すドイツ系の人が70%だそうだ。

⑥街について

シャモニはアルピニズム発祥の地としての風格と高級リゾート地としての華やいだ雰囲気に包まれたステキな街だった。街の中央には、例のソシュールとバルマの銅像がモン・ブランを指差し、国立登山学校、ガイド組合、フランス山岳会シャモニ支部、山岳博物館、カジノ、ゴルフ場、はたまたフランス娘がトップレスで泳ぐプールがあり、上空をパラパウントが飛ぶ。

レストラン、バーには必ずテラスがあり、人々はそこで乾いたふり注ぐ陽光の下、ビアを飲む。フランスのビアとワインは安くてうまい。だからついつい飲み過ぎてしまう。

中央には有名な「スネル・スポーツ」があり、山道具なら全て揃うし、ザイルなど直接生命に関わる以外の物ならレンタルがある。ここでピッケルを借りたが、案外高く、長期では不利だ。カードがないと借りれなかったが、ここにいる人も散見された。

モン・ブランアタックの場合は、ミディのコスミック小屋利用の方法もある。ガイドツアーの人達が利用したが、混まないうえ、食事も良かったとのこと。ただし、モン・ブランまで、モン・ブラン・デュ・タキュルとモン・モディを越えなければならないし、標高差も1200mとグーテより200m多い。

小屋に入る時は、ピッケル、アイゼン、靴は入口に置き、ゴム製でも、立地条件、混み具合で多少の差はあるようだ。慣れた人は、果物、飲物を沢山持参して補っていた。登頂した帰り、オムレツを注文したら、ジャガイモ入りのすごいボリュームのもので、うまかった。モンテ・ローザ小屋では、軟らかいライス、ソーセージなどで大体同じだが、おかわりが出来たのはうれしかった。ランチの目玉焼入りスパゲッティはビールにピッタシだった。朝食は両者とも簡単で、少々カビ臭い硬いパンと理に飽きた我々は、ナットウ、冷双、しょうが焼定食、日本酒など味わった。ミディ～プラン縦走時は、いよいよ行動食に困って、1ケ250円のムスビを頼んでしに93FFのおもちゃ時計を買った時、ホコリが付いていたので、下手な英語で3FFまけろと言ったら、ちゃんとまけてくれた。私は日本でも時々値切るが、フランスの後を一生懸命追いかけている。（これ本当）

街中を1周する観光馬車もあり、毛利は我々を出し抜いてワインを飲みながら？優雅に楽しんだ様子。

勧める日本人の神田泰夫の「顔」で信用してもらった。神田は親切でいろいろ相談にも乗ってくれるし、日本人（文）の登山届を提出して置けば、何かの時は適切な処

越えなければならないし、標高差も1200mとグーテより200m多い。

小屋に入る時は、ピッケル、アイゼン、靴は入口に置き、ゴム製で大体同じだが、おかわりが出来たのはうれしかった。ランチの目玉焼入りスパゲッティはビールにピッタシだった。朝食は両者とも簡単で、少々カビ臭い硬いパンと揃うし、サイルなと直接生命に関わる以外の物ならレンタルがある。ここでピッケルを借りたが、案外高く、長期では不利だ。カードがないと借りれなかったが、ここに勤める日本人の神田泰夫の「顔」で信用してもらった。神田は親切でいろいろ相談にも乗ってくれるし、日本人（文）の登山届を提出して置けば、何かの時は適切な処置をしてくれる。

ただどの店も昼休みは長く大体14時半までクローズしている。見ていると昼食はワインを飲み、おしゃべりしながら悠々と摂っている。うらやましい限りだが、やはり向うの人達はよく「会話」するという印象だった。

近くにフランス山岳会シャモニ支部がある。ここでフランス山岳会に入会すると、アルプス全域にヘリコプターを飛ばせる保険に自動加入出来る。少々高いがこれには必ず加入した方が良い。とにかくフランスのヘリコプターと遭難救助技術は世界一なのだから。足の悪いオバさんが手続きをしてくれるが、英語が通じないので苦労した。流行語の「ノン・ノン・ノン」はこのオバさんの言葉。

「さつき」という日本料理専門店がある。ここは村松の知人の白野という日本人ガイドの奥さんが経営しているが、従業員には、アルプスの写真で有名だった故中野融の奥さんも働いていた。西洋料理に飽きた我々は、ナットウ、冷双、しょうが焼定食、日本酒など味わった。ミディ～ブラン縦走時は、いよいよ行動食に困って、1ケ250円のムスビを頼んでしまった。いつも日本人で混んでいて、ある日、今井通子もいたと毛利の報告もあったが、私は酔っていて気がつかなかった。

換金はどこでも大差はないが、便利だったのが自動両替機で、ケーブル代金が無かった早朝、これで助かった。1万円ならレートも悪くなく24H利用出来る。同じ機械がチューリッヒ駅にもあった。全も安全なのはやはりT／C（トラベラーズ・チェック）だ。

その他、狩猟民族の名残りか、犬の市民権が確立されていて、レストランのテーブルの下、登山電車の中等、人間の生活にしっかり根づいている。また、観光地だけあり、全体的に親切であるが、シャモニのみやげ物屋で店の人に断わらず商品を手に取って見ていたら、マナーが悪いとしかられた。余程私の人相が悪く、万引きでもすると思ったのか？国際紛争にしたくなかったので、「分らん事は聞いてくれ」と言いたかったのではと解釈した。余談だが、別の店で子供時間に通過したい。我々は予備知識がなく分からなかった。

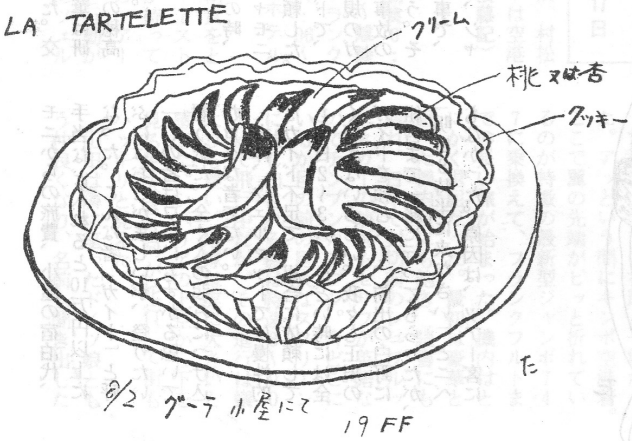
小屋番はドイツ系の人で英語は全く通ぜず、少し分かる娘がドイツ語に訳して話す。村松が一時行に93FFのおもちゃ時計を買った時、ホコリが付いていたので、下手な英語で3FFまけろと言ったら、ちゃんとまけてくれた。私は日本でも時々値切るが、フランス野郎もずいぶんたまげただろう。何でもやってみなきゃ分らない。この度胸でもう少しフランス娘も口説けば良かった？

ツェルマットは土地が狭いためか、さほど大きな街でなく、駅前など意外と貧弱。少し歩くと古い農家や校倉造りを思わせる穀倉など並んでいる。

排気ガスを出す車は規制されているので、大型バスもバッテリーカーだ。

1度救急車を見たが、それは普通の車だった。代わりに馬車が多く、街中を走っているので、馬フンがいたる所に落ちている。酔っぱらって歩いていると踏んずけたりするが、専門に回収するオジさんがいて、馬の後を一生懸命追いかけている。（これ本当）

街中を1周する観光馬車もあり、毛利は我々を出し抜いてワインを飲みながら？優雅に楽しんだ様子。夕方必ず羊の群がカウベルをガランゴロンさせながら街中を正々堂々と闊歩して行くが、どうも観光客用の「ヤラセ」の雰囲気。夏スキーも盛んで、クライン・マッターホルン（3884m）からデ



オテュル氷河、プラトー・ローザ周辺は全長25km、標高差1800mコースという。日本の子供達が20人位滑っていてビックリした。

なお登山届は「ベガ」の西永公治のところに提出する。

チューリッヒは運河が流れ、石造りの建築物には立派な彫刻が施され、中世の面影を色濃く残した博物館の様な街だった。帰りに泊ったホテルの隣には、巨大な教会があった。誰もいなかったが中に入らせてもらったら、体育館の数倍はある大きなもので、大理石の床はチリひとつなくピカピカに光っていた。パイプオルガンを備え、高い高い丸天井にはステンドグラスが輝き、祭壇にはローソクが静かに揺れ、壮厳そのものだった。こんな環境でお祈りをすれば、誰でも敬虔な信者になれるかも。街中には塔が多く聳え、その一つの時計塔の開始は1600年代だった。日本のお寺の梵鐘と感覚的に似ているが、響く音色もどこまでも重みがある。また、一歩裏道に入ると、石畳の狭い路地が複雑に続き、所々ある広場には噴水がほとばしっていた。どこを見ても「絵」になる「異国」で、スケッチをしている人も多い。そこのレコード店に入ったら全て「アナグロ盤」で日本では貴重なジャズレコードが沢山あった。

観光客が多いため、夕方になるとあちこちで大道芸人がパフォーマンスを始める。歌、手品、曲芸など様々だが、とにかく面白く楽しめる。実力を感じさせ、本物がこうして育っていくのだと思った。1人で手品をやっていた人に毛利が呼ばれ、何とかこなしたので拍手喝采だった。

⑦装備

靴はプラブーツも検討したが、ムレを考え、全員革製を使用したが、濡れ、寒さの問題はなかった。プラより少し重いのが難点だ。従ってアイゼンは、12本爪の1本締めになるが、氷河では着脱が多いのでワンタッチが有利である。ピッケルは前述の通り持参したい。ザイルは岩登りでない限り9ミリシングルで良い。ヤッケ上下はゴアの雨具で良かったが、向うの人は素肌の上に冬用を使用している人もいた。無線機は使用しなかったが、グーテ小屋で日本製を持ったフランス人がいた。交信可能と思うが、規則、言葉は研究課題。全体的には、5月の穂高を登る装備で充分であった。

⑧ガイド

ガイドはマッターホルンの時、毛利、村松につけるべくシャモニ在住の日本人山崎祐和に依頼した。彼はいわゆるモグリのガイドで、ガイド組合で認められた正規のガイドではなかった。従って事故の責任も保障もとれないという。その上、日本語を話すという事で、正規ガイドより料金が高く、シャモニからの旅費、小屋の宿泊代、手当など入れると10万円以上になった。こんな者「ガイド」と呼ぶにはおこがましいが、登りたい一心の者はワラにもすがる思いで雇う訳だ。全く人の弱みにつけ込むロクな者でない。

大体、ツェルマットでは慢性的なガイド不足で、組合に依頼しても1日2〜3人、ひどい時には全く雇えないらしい。我々も正規のガイドを頼むべく、前出の白野に組合まで一緒に行ってもらったが、「明日8時半に来なさい」とニベもなかった。原因は、ツアー客に一シーズン契約することと、スイスでは、スイス人しかガイドになれない事がある。そして条件の良い日のガイドは、多くの場合、ヘルンリ小屋で客を待ち、少なくも

には沢山釣れるとあったが、小さなマスが1匹だけだった。エサはゴミ置場の裏を掘ってミミズを取った。フランスにも日本と同じミミズがいたのだ！

NHKの基礎、続基礎で勉強したが、やらないよりは効果はあったと思う。しかし、いかにせん「カタコト」の域を出ず、随分はがゆい思いをした。せめて、英語はマットに行く北海道の男性2名であった。やはり若い人は少なく、少し暇と金の出来たオジ、オバさんが多い。ロビーの売店で村松が「胴巻き」を買い、隊の全財産の

ラック・ブラン
た

一シーズン契約することと、スイスでは、スイス人しかガイドになれない事がある。そして条件の良い日のガイドは、多くの場合、ヘルンリ小屋で客を待ち、少なくも1日2往復、タフな人は3往復もして稼ぐそうである。だから彼等は悪天候になると街に降りてきて休養するのだ。

我々は結果的にはマッターホルンに新雪が積もり山行は中止になり、山崎もツェルマットに来なかったが、自力で登ればそれにこした事はない。

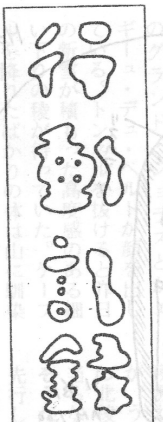
⑨その他

国際電話は、シャモニで2回、ツェルマットで1回通話した。先に3分、2500円位のカードを買えば、街中の電話BOXで簡単に出来る。時差は7時間半位なので、午後1時頃が丁度良い。非常に明瞭で、国内の感じがする。若干の時間差があるので、あまり速く喋らない方が良い。

フランスの建物の階の呼び方は、日本の1階が0階、2階が1階だった。エレベータに乗ったが、0階のボタンがちゃんとあった。

釣道具を持参したので、シャモニのヴーブ川で釣りをやった。本には沢山釣れるとあったが、小さなマスが1匹だけだった。エサはゴミ置場の裏を掘ってミミズを取った。フランスにも日本と同じミミズがいたのだ！

オートバイ、カメラ（オリンパスが多い）はほとんど日本製。車は意外と少ない。英語は1年間、NHKの基礎、続基礎で勉強したが、やらないよりは効果はあったと思う。しかし、いかにせん「カタコト」の域を出ず、随分はがゆい思いをした。せめて、英語はもっと勉強して行くべきだ。隊の諸般は全て村松が対応してくれたが、1人堪能者は必要だ。



7月30日～8月17日

7月29日（晴）

〈タイム〉三島駅18：45～東京20：01～成田21：00～ホテル21：15（泊）

飛行機が午前で集合も早いので前夜成田泊となった。当日車利用も考慮したが事故、渋滞、駐車のリスクでやめた。安全確実ならば駐車料金は17日間でも、4人の宿泊費より安いので、重荷移動も考えれば車のが有利である。家族、会員の盛大な見送りを受けて新幹線で出発。改めて無事に帰国しなければと誓った。それにしても30kg近い重荷は閉口する。成田エクスプレスで成田に向かい「エアーポートレストハウス」に入る。室は毛利－後藤、山田－中田、村松は1人部屋泊まり。窓の下は空港だった。

（後藤記）

7月30日（晴）

〈タイム〉起床5：30～朝食6：30～7：00～搭乗9：20～離陸10：00～ソウル11：45～フランクフルト乗換20：50～離陸21：06～チューリッヒ21：37～ホテル「ポーリィ」（泊）

ホテルのレストランで朝食をとり空港へ。集合場所で「イースト・ツアー」の若い二宮嬢が待っていた。同行者はホテル泊のツアーの男4名と女4名、我々と行動が逆でやはりテント泊で先にツェルマットに行く北海道の男性2名であった。やはり若い人は少なく、少し暇と金の出来たオジ、オバさんが多い。ロビーの売店で村松が「胴巻き」を買い、隊の全財産の100万円をしっかりとしまい込んだ。出国審査は簡単にパス。心配した重量もノーチェック。本当は20kgまでだから5割も超過している。大韓航空に搭乗して、とりあえずソウルに飛ぶ。席はバラバラで私はツアーの香取と一緒だった。アッという間にキンポ空港着。ここで翼の先端がピッと折れているのが特徴の最新型ジャンボ747に乗換えて、フランクフルトまでの長い旅が始まった。機内はとにかく退屈だった。最初は豪華と思った機内食にも飽き、読書にも疲れ、日本で封切前のシュワルツェネガーの映画もセリフが英語なのでチンプンカンプン。今どこにいるか目の前の巨大なスクリーンに映し出される機は時速8～900kmで飛行中だが、その進行は蟻よりも遅い。地球は実に大きいと感じた。シベリアの上空から下を見ると大きな河が蛇行して街もハッキリと見えた。

山田は隣に座ったドイツ娘ともう仲良くなり、名前も聞き出した

チューリッヒ
ホテル「プーリィ」

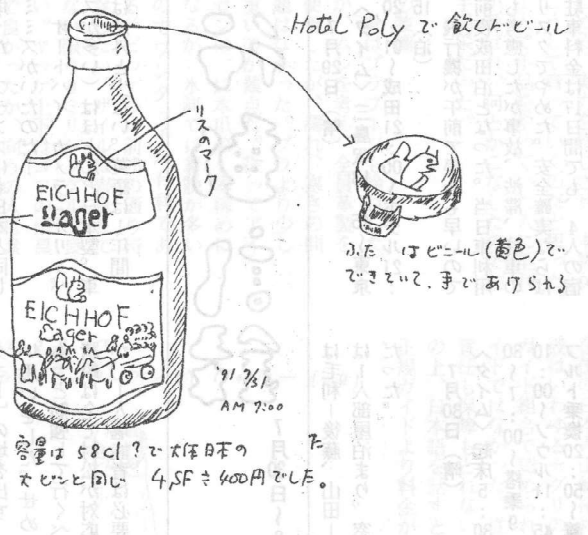
様だ。彼のバイタリティーに脱帽。ようやく、ようやくフランクフルト着。時間が少しあるので皆でロビーを散歩し、私の持っていたドルでビールを飲む。けっこう高く、勘定をごまかされたと思ったが正しかった。トイレにはエイズ予防のコンドームの自販機がある。黒人がブラシで朝顔を掃除していた。ここでまた乗換えてチューリッヒに向かう。30分程で着き入国しようと出口に向かうが、村松が機内にパスポートを忘れ慌てて取りに行く。皆はフリーパスで先に入国。私は1人ゲートで待っていたので、太った人の好さそうな係官に「プリーズ・スタンプ」と言ってパスポートにスイス国の「入国印」を押してもらった。この記念すべき捺印をもらったのは私だけだった。タクシーでホテル「ポーリィ」に向かう。古い建物だったがそれなりに味があった。1階（いやゼロ階）のバーでT／Cを使いビール（下図参照）を買い北海道の2人と5人で軽く飲む。声が大きいので隣の銀髪の御婦人に「シー」を連発させられた。（後藤記）

7月31日（雨、シャモニ）

〈タイム〉起床6：45～出発9：00～シャモニ13：35（泊）

チューリッヒの朝は路面電車の「ゴー、ゴー」という音で明けた。5時頃より動いているのでけっこううるさい。見ると女性の運転手も多かった。散歩に出てみると、すぐ近くに「コープ」があった。日本にはない野菜も多く、大きな黄色いピーマン？に驚いた。街並は美しく、街灯なども電柱式でなく、建物と建物をワイヤーで結び真中に灯りを取付ける方式なので非常にスッキリしていた。ただ、建物の壁にはスプレーの落書きが多かった。

移動はツアーの人達と一緒。国境を越えて間もなくすると、氷河が見えたので皆で喚声を上げバスを止めてもらい、記念撮影をする。いよいよシャモニだ。ワクワクしてきた。ツアーの人達が泊まるホテルに到着。ここからBCへ行くのだが、あいにくの雨。テントの設営は大変だろう。



毛利、後藤、村松は買出しで、山田、中田はタクシーでテント場に向かう。スネルスポーツを探すが、閉まっている。休みかと思ったが、昼休みとのことだった。しかも、日本人の神田は、3時からなので、出直す。その間にフランス山岳会へ。またまた閉まっていて、途方にくれていたら、婦人がカギを開けたので、入ろうとすると、「ノンノン。3時から。」とのこと。やれやれ、なかなか厳しい。山岳会入会手続きもフランス語の為、スムーズにいかなかったが、何とか終わった。会費は意外に高かった。

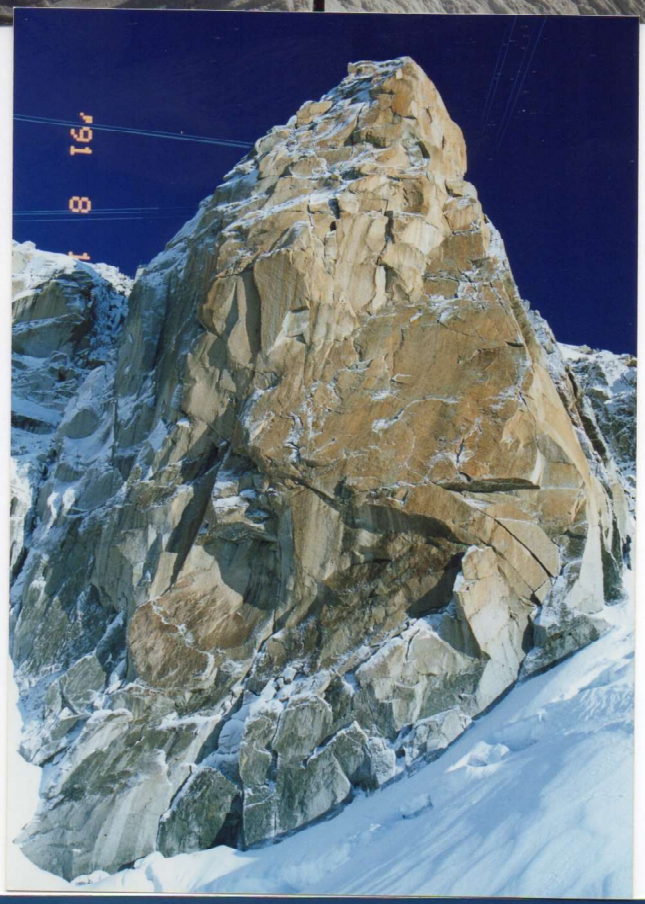
スネルスポーツへ行くと、神田がいて、日本人客の相手をしていた。やはり日本語で話せるのは、有難い。ピッケルを借りる。本来ならカードが必要だったようだが、私達は持っていなかったので、神田にお願いした。それから私は、スネルスポーツ気付でガイドの白野に、マッターホルンのガイド依頼の手紙を出してあったので、神田に白野のことを聞くと、奥さんが「さつき」という料理屋をやっているので、そこへ行けばわかるとのこと。

そして、スーパーで買物をした。お米があるとのことだったが、見つからなかった。

ロジェールキャンプ場に着くとキャンピングカーが多くて、驚いた。私達のテントの上には、雨がミディ駅で支度をする。ハーネスの着装方法を知らないガイドに連れられたお客、ペラペラのカップの夫婦連れ、若い可愛い娘とか、言葉もゴチャゴチャで実ににぎやわれた事もあるが、どこかに忘れてきてしまったのだろうか。

ヴァレ・ブランシュの源頭を登って行く。すでに標高は富士山より高いうえ、仲々の傾斜で厳しる私は、引張られる。「あっ落ちる！」少し滑落したが、毛利が止めてくれた。（村松記）

帰りにミディの下を通るとツ



バァレ・ブランシュ氷河

で隣の銀髪の御婦人に「シー」を連発させられた。（後藤記）

7月31日（雨、シャモニ）

〈タイム〉起床6：45～出発9：

お米があるとのことだったが、見つからなかった。

ロジェールキャンプ場に着くとキャンピングカーが多くて、驚いた。私達のテントの上には、雨が降っても困らない様に、ブルーシートが張ってあった。さすが！ビール、焼肉でシャモニ第1夜を祝う。（村松記）

8月1日（晴のち曇）

〈タイム〉起床3：00～出発4：45～ミディ駅発7：20－モン・ブラン・デュ・タキュル11：40～45－ミディ駅15：00～BC16：50（泊）

高度順応を兼ねてトゥール・ロンド（3792m）をめざしたが、ミディからエルブロネルのケーブが強風で運休のため、モン・ブラン・デュ・タキュル（4248m）に変更した。運休は朝シャモニの駅で分かったが、「なぜ」の問いに「ノン・ノン」と言うばかりでラチが明かない。今思うと彼は英語が話せなかったのか。他のアプローチとして、バスでモン・ブラントンネルを越える方法があるがこの時はまだ知らなかった。板橋労山は北壁の時これを使ったとのこと。トゥール・ロンドは憧れていただけに残念だった。

ミディ駅で支度をする。ハーネスの着装方法を知らないガイドに連れられたお客、ペラペラのカップの夫婦連れ、若い可愛い娘とか、言葉もゴチャゴチャで実ににぎやか。8ミリを回すと皆喜んでポーズを作ってくれた。天気は昨日の雨が上り、一面の雲海で、高い山のグランド・ジョラスとかエギュ・デュ・ベルトが顔を出している。トンネルを抜けると昨日の新雪が積もった高度感のある細い下りの稜が待っていた。ケーブルを降りたばかりの体は山に馴染まず恐い。ここは慎重にアンザイレンしたい。

ヴァレ・ブランシュ氷河に降り立つ頃には雲がちぎれ大展望となった。正面にはモン・ブランが見える。すばらしい！の一言。とうとう我々はアルプスに来たのだ。あのボナティが、レビュファが活躍した舞台に。

氷河で休憩していると、先程のペラペラヤッケの夫婦が来てフランス語で何やら言っている。良く分からないがどうも食料が欲しいらしい。村松がパンとリンゴを譲ってやると「メッシー」と愛想よく笑い20FF置いていった。昔、剣岳で池ノ谷を登って来た若者に「何か食べる物ありますか」と言われた事もあるが、どこかに忘れてきてしまったのだろうか。

ヴァレ・ブランシュの源頭を登って行く。すでに標高は富士山より高いうえ、仲々の傾斜で厳しい登り。大きなクレバスも所々にパックリ口を開き、ルートはそれを縫う様に進む。必ずどこか一ヶ所渡れるスノー・ブリッジがあるが、うまく出来ている。タキュルの北稜を誰か登っているが、陽が当らないので寒そう。村松が苦しそうだったので、山田、中田には先行してもらう。ただ2人共今日はサングラスを掛けていないので正すと、「忘れて来た」との事。この強烈な反射の中、大丈夫かな。村松は明日からモン・ブランが始まるので、無理して潰したくなかった。毛利も同じ意見であった。今日はあくまで「調整日」である。（後藤記）

いよいよ登りにかかる。大きなクレバスがあり、その上はかなり急な雪壁で、慎重に登る。ところが私は、頭がボーとしてきて、どうも調子が良くない。高山病なのだろう。ひどくならないうちに中止してもらい、下山にかかる。急な雪壁は凍っていて、先頭の毛利が滑った。ザイルでつながれている私は、引張られる。「あっ落ちる！」少し滑落したが、毛利が止めてくれた。（村松記）

帰りにミディの下を通るとツアーの連中も「調整」に来ていた。ガイドが前出の山崎1人なのでどこにも行けない様だ。こんな事でモン・ブランに登れるのかと他人事ながらあきれた。もっとも中には「命知らず」もいて、来る時飛行機で隣だった香取青年は、単独でジェアン氷河に行き、クレバスに落ち、軽い捻挫で済んだが、危うく大事故になる所だったそうだ。チューリッヒからのバスの中でその事を話していたので「絶対やめた方が良い」と言ったのにもかかわらず。何かあれば一緒に来ている人にどれ程迷惑を掛けるか彼は自覚していない。

ミディの登り返しで1人の青年と会ったので話す。彼はシャモニに住むガイドの卵で、時間のある時はこうしてパトロールをしてるといった。何か急に嬉しくなり握手。浅黒く雪焼けした精悍な顔はきっと将来立派なガイドになることを思わせた。山田、中田は無事タキュルに登って帰幕したが、夜中に「目が痛くて眠れない」と大田に白野のことを聞くと、奥さんが「さっき」という料理屋をやっているので、そこへ行けばわかるとのこと。

そして、スーパーで買物をした。

だが、あいにくの雨。テントの設営は大変だろう。

モン・ブラン

4807m

村松美喜代
後藤　隆徳

●ニー・デークル～グーテ小屋～モン・ブラン～ニー・デークル

▽91年8月2日～3日

▽CL後藤隆徳（44）毛利哲也（58）山田　茂（47）中田　明（30）村松美喜代（42）

▽標高差＝2435m

8月2日（晴）

〈タイム〉起床4：00～出発6：00～シャモニバス停6：15～7：00～レ・ズーシュ～ベルヴュー～ニー・デークル発9：00－グーテ小屋13：45（泊）

両名の雪盲は、中田がひどく目を開けていると涙が止まらない。本人の強い意志もありとにかく出発。計画ではレ・ズーシュまで電車の予定だったが、相模労山がバスのが便利と助言してくれ変更した。ところがシャモニのバス停で行先表示を見るとレ・ズーシュでなく「Les・Houches」とある。果してこれがそうかと考えてしまった。バスに乗り切符を買おうとして英語で言うが通じない。困っていると、キャンプ場で知り会った英語が堪能な中央大学の学生小林が乗り込んで来たので、一緒に買ってもらった。日本人計8名で犬も乗って来たので驚いてしまった。レ・ズーシュで靴下を買ったら95FFもした。（村松記）

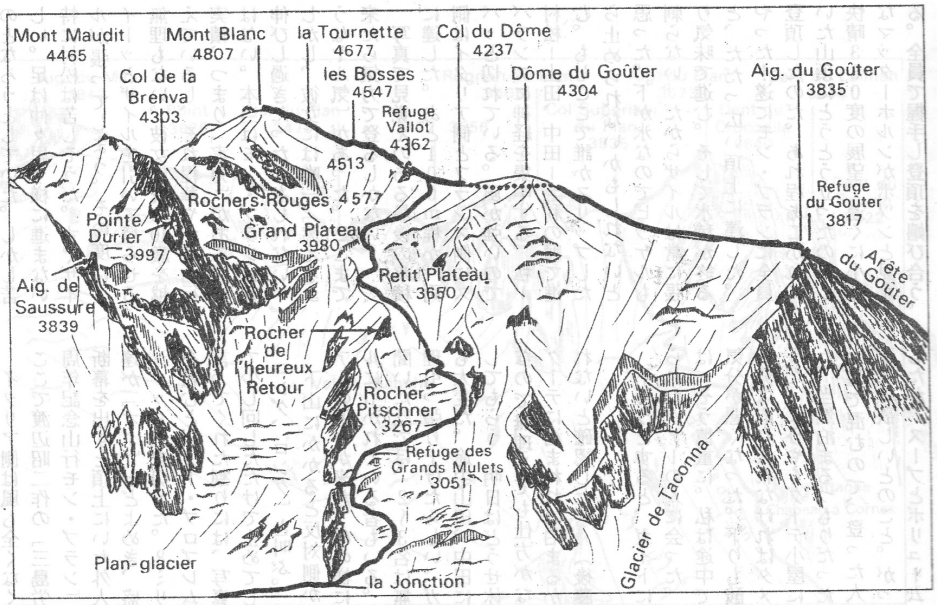
ケーブルでベルヴューに上る。天気は上々で、夏山独特の朝の冷気が清々しい。50名位の中に日本人も何人か見える。目の前には、ビオナセイ氷河の向うに、ビオナセイ針峰（4052m）が朝日に輝いていた。今日の行程は、グーテ小屋までだが、何としてもキャンセル空きが欲しいので、隊を2つに分け、後藤、山田、中田が先行する計画にした。登山電車終点のニー・デークル（2372m）より競う様に登って行く。途中まで一緒だった小林も先に行く様子なので、「もし、我々より先に着いたら、我々の分までキャンセル待ちを入れてくれ」と依頼する。彼は友人とグングン登って行った。テート・ルースから凍った所もあるのでアイゼンを付ける。大クーロワールは確かに危険な所で、右の脆い岩稜の登山道からの落石が全てここに集中する。見ているとコブシ大の石がブンブン落ちている。とにかく注意して急いで渡るしかない。渡るとこの先は急で登り難い岩稜が続く。こんな所によくルートを拓いたと思うが、モン・ブランのガイドブックはあまりここの岩場に触れていない。だいぶ前の「山と仲間」には書いてあったが、やはりハイカーが苦労した様だ。頭上真上に紺碧の空をバックに、ジュラルミン製のグーテ小屋は光っているが一向に近づかない。所々に、鎖、ワイヤーロープ、手摺りが設置されている。私は1人で登っていた。目の前にビオナセイ針峰が大きく立ちはだかり、北壁が美しく光り輝く。バテバテで小屋着。予約はすでに小林が済せてくれた。20分程して山田、中田着。ココアを飲んだり、クッキーを食べたりのんびりする。毛利、村松が遅く、迎えに行くかなどと上から覗いているとやっと来た。15時25分だった。これで我隊5名と小林と友人の千葉、そして単独の木村の全員が揃った。ビール、スープを飲んだりリラックスする。毛利は調子がいまいちでビールは飲まなかった。

グーテ小屋は、ほぼ富士山頂と同標高に位置し、新、旧館の2棟がある。収容人員は300名位で、旧館の外壁はジュラルミン製で出来、中は非常に暑い。我々は夕食後の部屋割り指示があるまで、食堂で待機する。入れ替り、立ち替り、いろいろな人がワイワイガヤガヤ実ににぎやかである。

テーブルの向いにイタリア人4名が座った。彫の深い、鼻筋の通ったミロのビーナスそっくりの女性も1名。話をすると「イタリア山岳会」のパーティーで会員証を見せてくれた。私が背負ってきたウィスキーを振舞ったり、交流を図る。ビーナスともありったけの英語を駆使して迫るが、やがて言葉もなくなってしまった。その点小林はあちこちでペラペラ。全くうらやましい。彼は現在4年生だが休学して1年位前にヨーロッパに来たという。出来ればシルクロードをバスで3月まで日本に帰り来年は卒業したいと言っていた。木村以外は部屋を取れた。彼は小高気圧が張り出したからだろう。小屋が暑かったので、毛利、村松、私はヤッケとズボンを着てこなかったので寒くなる。私はグーテで休憩の時、素早く着てしまった。

騒ぎ。やっぱり雪盲になった。村松に目薬を貰って何とかしのいだ。2人共素人でないのにちょっとした油断だった。（後藤記）

本人の強い意志もありとにかく出発。計画ではレ・ズーシュまで電車の予定だったが、相模労山がバスのが便利と助言してくれ変更した。ところがシャモニのバス停で行先表示を見るとレ・ズーシュで



セイ針峰（4052m）が朝日に輝いていた。今日の行程は、グーテ小屋までだが、何としてもキャンセル空きが欲しいので、隊を2つに分け、後藤、山田、中田が先行する計画にした。登山電車終点を図る。ビーナスともありったけの英語を駆使して迫るが、やがて言葉もなくなってしまった。その点小林はあちこちでペラペラ。全くうらやましい。彼は現在4年生

私は1人で登っていた。目の前にビオナセイ針峰が大きく立ちはだかり、北壁が美しく光り輝く。バテバテで小屋着。予約はすでに小林が済せてくれた。20分程して山

だが休学して1年位前にヨーロッパに来たという。出来ればシルクロードをバスで3月まで日本に帰り来年は卒業したいと言っていた。木村以外は部屋を取れた。彼は小林とずっと一緒にいたので、てっきり頼んでくれたと思い宿泊費を払込まなかったらしい。他にも50名位いた。ガックリしても仕方がない。がんばって食堂に寝るしかない。ビーナスも駄目だったみたい。ベッドは狭く、暑く、騒々しく、決して快適でなかった。熟睡感のないまま起床時間を迎えた。

（後藤記）

8月3日（快晴風強し）

〈タイム〉起床2：00～出発3：10－モン・ブラン頂上8：30～9：00－ヴァロ小屋10：10－グーテ小屋12：00－ニー・デークル15：00～BC17：00（泊）（毛利、後藤、村松はシャモニ駅20：00）

まだ眠いが皆を起こす。すでに食堂は満席に近い。天候は大丈夫の証拠だろう。カビ臭いパンで簡単な朝食。トイレも混むので手早く済ませる。満天の星空の下、ザイルを結び、ランプをつけて出発。巨大なドーム・デュ・グーテをジグザグに登って行く。風がある。高気圧が張り出したからだろう。小屋が暑かったので、毛利、村松、私はヤッケとズボンを着てこなかったので寒くなる。私はグーテで休憩の時、素早く着てしまった。だだっ広いグーテをいったん下って再び登ると、前方にヴァロ避難小屋が見えた。この小屋は外壁がジュラルミン製で光っているので、シャモニからも遠望できる。避難小屋といっても立派なもので、日本の「それ」とは比較にならない。アルプスでは避難小屋は緊急時しか利用出来ないが、グーテ小屋が混雑するので、意識的にここに泊りアタックするやからもいる様だ。近年、マッターホルンのソルヴェイもその様な利用を特に日本人にされていると聞くが、全く残念である。ルール違反をしてまで登って何の意味があるのか。

ボス山稜に入る。雪はこの辺りからガチガチの氷に変わる。静かな夜が明けた。モン・ブランの東面の雪面が、モルゲンロートに赤く染まる感動的な夜明けだった。風はあるが、雲ひとつない快晴。恐らくアルプスの山々が全て見渡せるだろう。昨日登ったミディもタキュルもすでに足下になった。我々の「夢」は少しずつ現実のも

ベェルヴュー

怖い下部
トラバース

ビオナセイ針峰

のとなろうとしていた。しかし苦しい。足は仲々思う様に進まない。特に村松は苦しそうだ。すぐザイルが張ってしまう。その度にグイーッとザイルを引いて登らせる。無理もない。彼女は既に40歳を越えているし、それ程華やかな山行実績、つまり「実力」がある訳ではない。本当はモン・ブランは背伸びし過ぎだったかもしれない。しかし、彼女には唯一「燃えるようなヤル気」があった。ここまで来たら気力で登るしかない。

写真で見覚えのある最後の氷稜に達した。あと100m程か。両側はイタリア側とフランス側にスパッと切れている。風が強いのでバランスに神経を集中する。私－村松－山田、中田－毛利の順で進む。もしここで誰かスリップしたら止められないかもしれないと思った。下が氷なのでピッケルも刺らない。だからザイルは常に張り気味で進む。そして氷稜が終ると、ただっ広い頂上に達した。やった！遂にモン・ブランに全員登頂したのだ。あれ程あこがれていた山頂にとうとう立ったのだ！快晴360度の展望。遠くに小さなマッターホルンがポツンと見える。全員で握手し登頂を嬉び合う。

イタリア側は風も全くなく暖い。ここで渡辺昭二作の「三島労山20周年記念山行モン・ブラン」の横断幕を出すと頂上にいた外人さん達が「オー」とどよめき、盛んにシャッターを切った。8ミリ撮影を頼むと「ノー・プロブレム」と言ってくれた割りには、写真感覚で少し回しただけで止めてしまう。「ロング、ロング」と叫ぶ。

下山にかかると反対側からツアーの連中が来た。牛の様にザイルに引かれている者もいる。後で聞いた話では、2～3名は無理矢理引っ張り上げたらしい。ガイドも大変だ。途中山田、中田に先行してもらう。明日はどうせ休養日なので無理しても仕方がない。グーテに泊まれれば泊まるかもしれないと確認した。（後藤記）

下ろうとすると、ガイドに連れられたツアーの人に会った。下山は一そう慎重に。私は途中で少し気分が悪くなった。下りも酸素を充分に取り入れなければダメのようだ。ようやくグーテ小屋に着いた。当然泊まるつもりだったが、土曜で混むので、登った人は、下って欲しいとのこと。がっかりしたが、スープとボリュームたっぷりのオムレツを食べたら、少し元気が出てきた。岩場は昨日より大部雪が解けていたので、途中でアイゼンをはずす。テートルース小屋の少し上の所で、「ここは、落石の多い所だ。」と後藤。上の方を見ながら歩いていると、落石があった。ニー・デークルまで、とても長かった。登り1000m、下り2421mを一日で歩いたのだから、「本当に良く歩いたものだ。」と我ながら感心する。もちろん初めてである。最後の方は、足が痛くなって辛かった。ニー・デークルで最終の登山電車を待つ時間が長くて、氷河のすぐ近くだったので、寒くなってきた。この付近で沢山の野生の「ブクタン（山羊）」を見た。帰路はルファイユまで登山電車、シャモニまで電車だった。夕食は、白野に連絡する都合もあり、「さつき」に行った。

冷やっこに納豆、お酒等久しぶりの日本食に毛利は、「生き返ったようだ。やっと元気が出てきた。」と言った。もちろん後藤と私も。そう言えば、毛利は頂上でカメラを出さなかった。それ程寒くて辛かったようだ。遅くなってBCに着く。（村松記）

ワインを飲み酔っていた。隊にしらけムードが漂う。夜は夜で中田が大声で何か言っていた。日本を発って早や1週間、欲求不満もピークかもしれない。（後藤記）

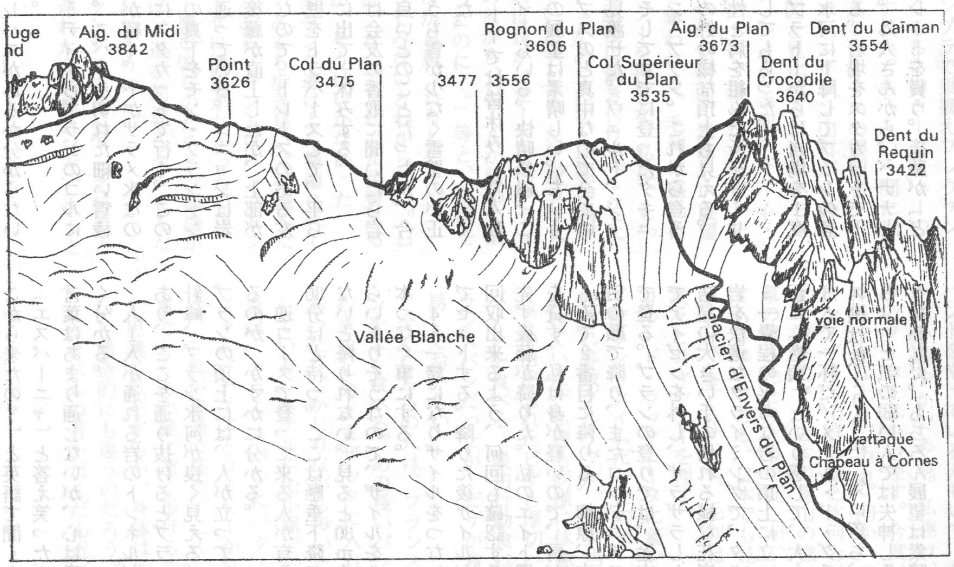
8月4日（快晴）

今日は休養日。といっても結構忙しい。洗濯機は使っていたので、手で洗い、テントの上とロープにかけて干す。そして日本への葉書を書き、ショッピングに出かけた。日本で買った陽焼止めクリームでは効き目がないので、スネルスポーツで購入した。

夕食を「さつき」でとっていると、ツアーの男性2名が来たので一緒にする。そして柳原が明日のミディ～プラン針峰に同行することになった。私と毛利は、ハイキング。フランスパンでは力が出ないので、3名分のおにぎりを頼んだ。（村松記）

朝食の時、山田から昨夕私達がいない時モン・ブランで一緒だった小林達と交流してワンタッチライスを振舞ったと報告を受ける。私はカチンと来て山田をなじった。ワンタッチライスは非常用で重たい思いをして日本から持参した物だ。遠征は始まったばかりでこれから何が起こるか分からない。振舞うならこちらでも入手出来る物にして欲しかった。彼の無神経に腹が立った。それを聞いた毛利が今度は私に辛く当る。彼は朝から

やった！遂にモン・プランに全員登頂したのだ。あれ程あこがれていた山頂にとうとう立ったのだ！快晴360度の展望。遠くに小さなマッターホルンがポツンと見える。全員で握手し登頂を嬉び合う。



充分に取り入れなければタメのようだ。ようやくグーテ小屋に着いた。当然泊まるつもりだったが、土曜で混むので、登った人は、下って欲しいとのこと。がっかりしたが、スープとボリュームたっ

ようた。やっと元気が出てきた。」と言った。もちろん後藤と私も。そう言えば、毛利は頂上でカメラを出さなかった。それ程寒くて辛かったようだ。遅くなってBCに着く。（村松記）

から何が起こるか分からない。振舞うならこちらでも入手出来る物にして欲しかった。彼の無神経に腹が立った。それを聞いた毛利が今度は私に辛く当る。彼は朝から

ミディ～プラン縦走

3673m

山田　茂

ワインを飲み酔っていた。隊にしらけムードが漂う。夜は夜で中田が大声で何か言っていた。日本を発って早や1週間、欲求不満もピークかもしれない。（後藤記）

●エギーユ・デュ・ミディ～エギーユ・デュ・プラン～ルカン小屋～モンタンヴェール

▽91年8月5日（快晴）

▽CL後藤隆徳（44）山田　茂（47）中田　明（30）柳原徳太郎

▽標高差＝全体的にないが、氷河の下降が長い。

〈タイム〉起床4：00～BC発5：00～ロープウェイ発6：30～ミディ出発7：20－ロニョン懸垂下降11：00－プラン頂上12：20－ルカン小屋14：45－モンタンヴェール17：40～シャモニ18：30（泊）

前日ツアー参加の柳原から同行したいと申入れがあった。我パーティーは3名でザイルワークが悪い事情がありOKした。彼は先日、ガイド付きだがアンデックス方面に岩登りに行ったし、国内でもマアマアの山をやっていたので、それ程心配はしなかった。

ロープウェイ駅には、1日に来て2度目なので迷わず行けた。今日も上天気で雲ひとつない快晴。気温も1日程低くない。モン・プランが朝日に輝く。後藤が8ミリを回すと皆珍しそうに見る。ロープウェイを降り、連絡橋からの縦走路の眺めは素晴らしい。日本から持参したカメラが壊れてしまったので、新品をシャモニの街で購入した。そしてこの素晴らしい展望の山行を写す事が出来た。この縦走は、雪と岩のミックスで天候に恵まれて楽しいクライミングが出来た。

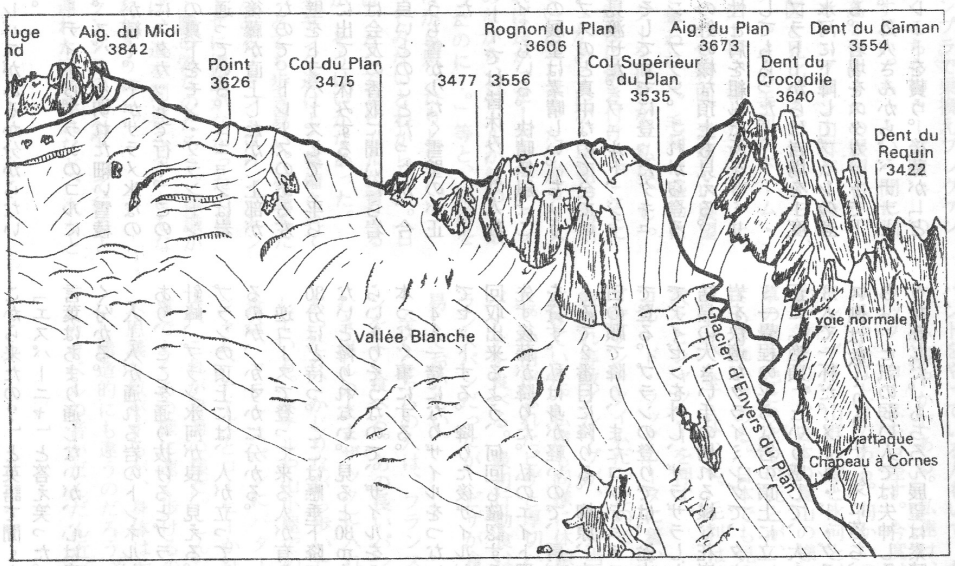
ゼルバン、スパッツ、アイゼンを付け準備をしていると、もう歩いている数パーティーがいる。後藤－山田、中田－柳原の組み合せで出発。ヨーロッパアルプスは全てコンテニアスで登る。どこにヒ

モン・ブラン上り

モン・ブラン頂上

1997.8.
三島労山20周年山行
モンブラン
Mont Blanc

やった！遂にモン・ブランに全員登頂したのだ。あれ程あこがれていた山頂にとうとう立ったのだ！快晴360度の展望。遠くに小さなマッターホルンがポツンと見える。全員で握手し登頂を嬉び合う。



充分に取り入れなければタメのようだ。ようやくグーテ小屋に着いた。当然泊まるつもりだったが、土曜で混むので、登った人は、下って欲しいとのこと。がっかりしたが、スープとボリュームたっ

ワインを飲み酔っていた。隊にしらけムードが漂う。夜は夜で中田が大声で何か言っていた。日本を

ミディ～プラン縦走

3673m

山田　茂

●エギーユ・デュ・ミディ～エギーユ・デュ・プラン～ルカン小屋～モンタンヴェール

▽91年8月5日（快晴）

▽CL後藤隆徳（44）山田　茂（47）中田　明（30）柳原徳太郎

▽標高差＝全体的にないが、氷河の下降が長い。

〈タイム〉起床4：00～BC発5：00～ロープウェイ発6：30～ミディ出発7：20－ロニョン懸垂下降11：00－プラン頂上12：20－ルカン小屋14：45－モンタンヴェール17：40～シャモニ18：30（泊）

前日ツアー参加の柳原から同行したいと申入れがあった。我パーティーは3名でザイルワークが悪い事情がありOKした。彼は先日、ガイド付きだがアンデックス方面に岩登りに行ったし、国内でもマアマアの山をやっていたので、そ

発って早や1週間、欲求不満もピークかもしれない。（後藤記）

れ程心配はしなかった。

ロープウェイ駅には、1日に来て2度目なので迷わず行けた。今日も上天気で雲ひとつない快晴。気温も1日程低くない。モン・ブランが朝日に輝く。後藤が8ミリを回すと皆珍しそうに見る。ロープウェイを降り、連絡橋からの縦走路の眺めは素晴らしい。日本から持参したカメラが壊れてしまったので、新品をシャモニの街で購入した。そしてこの素晴らしい展望の山行を写す事が出来た。この縦走は、雪と岩のミックスで天候に恵まれて楽しいクライミングが出来た。

ゼルバン、スパッツ、アイゼンを付け準備をしていると、もう歩いている数パーティーがいる。後藤－山田、中田－柳原の組み合せで出発。ヨーロッパアルプスは全てコンデニアスで登る。どこにヒ

から何が起こるか分からない。振舞うならこちらでも入手出来る物にして欲しかった。彼の無神経に腹が立った。それを聞いた毛利が今度は私に辛く当る。彼は朝から

た。」と言った。もちろん後藤と私も。そう言えば、毛利は頂上でカメラを出さなかった。それ程寒くて辛かったようだ。遅くなってBCに着く。（村松記）

PLANPRAZ

村松美喜代

●レ・ブレバン～プランプラ～コル・ド・ラッグコーヌ

▽91年8月5日（快晴）

▽毛利哲也（58）村松美喜代（42）

マッターホルンのガイドを依頼したイーストツアーの山崎に、電話をかける為、私は先にBCを出発した。キャンプ場入り口の電話ボックスでかけてみるが、つながらない。それでは、ホテルへ行ってみよう。急いで歩く。町に入ると電話ボックスがあったので、再度TEL。通じた。明日打合せの為、キャンプ場に来て戴くことにした。

さて、毛利は、後を見るが、姿なし。途中で会うだろうから、戻ってみる。かなり歩いてやっと出会った。プレヴァン行のロープウェーのマークを見つけた。

プランプラで乗換えプレヴァンへ。全くこちらのロープウェーの技術はすごい。あっという間に到着。標高2525mの展望台へ。あっモン・ブラン山群が！絵入

ドンクレバスがあるか分からないからだ。

まずミディからプランのコルに向かう。スパッと切れた細い雪稜の下降が続く。下がザラメ氷なので慎重にスタカットで行く。このミディの真下をモン・ブラントンネルが通っている。ロニョンは岩稜帯を後藤が直上したが、上部が脆い様なので、トレースのある左側の雪壁をトラバースして、平らな雪原に出て一休みする。

ここは会友の香取に聞いたら岩稜のが良いとのことだったが、今年はどうも雪が少なく雪壁のが正解だった。

プラトーでは皆休み、外人数パーティーもいる。快晴無風。ここからの展望は素晴しい。ちょうどアルプスのど真中なので全ての山々が見渡せた。ヴェルト、ジョラス、そしてすでに登ったタキュルとモン・ブラン。これから登るプランの針の様な頂上も見える。外人女性と肩を組んだ所を8ミリに撮影してもらった。

このプラトーからは岩場を1度プラン氷河に下降してプランの登りになる。岩場をスタカットで下降する。外人さんから、バナナとチョコレートを貰う。後藤が「どこから来たの？」と英語で聞くと「エスパーニャ」と答え笑った。言葉はあまり通じないが、心は良く分かる。

人1人が通れる岩のトンネルがあり、ここを通り抜けるとプラン針峰、プラン氷河が良く見える。プランの頂上には、人が立っているのが、かすかに分かる。

逆コースで登って来る人が有り30分ほど待つ。ここは懸垂下降でないと降りれない。見ると30mぐらいありそうなので、ザイルを2本つなぐ事にする。

4人一緒になりザイルをつないでセットする。降りた後ザイルが回収出来るよう、何回も確認する。先ず後藤が降りた。私のエイト環を貸す。私は身が軽いので、肩がらみで2番目に降りる。柳原、中田の順で降り、またコンテニアスで登る。プランの登りでは、途中でアイゼンを外し、ザラザラした結晶の大きい手の切れる様な花崗岩を快適なクライミングで、タタミ一畳程の平らな岩の頂上に立つ。正に「絶頂」という感じで、大人3人で一杯だ。メール・ド・グラス側は数100m一気に落ち、ちょっと気の弱い人では失神しそうな感じだ。もちろん展望は素晴しい。外人さんも皆良い顔をしている。頂上より15m程懸垂下降して基部で一休み。ここから一気にプラン氷河を下降する。

天気が良くて雪が腐っていた。クレバスが走り慎重に下降する。

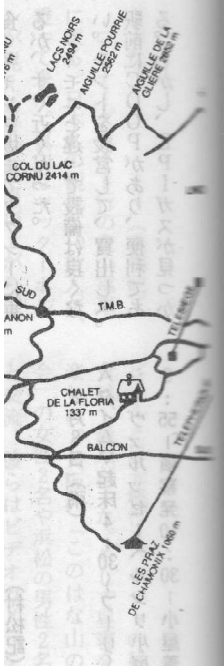
天気が良くて暑い。ルカン小屋の手前で氷河の水を飲む。非常にうまかった。アイゼンを外す。小屋の近くで黄色い花がいっぱい咲いていた。小屋も石造りでがっしりしていた。

小屋泊の予定だが、登山電車の最終とコースタイムを考え、下山する。下の方の氷河は、固くてザラザラしている。アイゼンを付けなくても滑らない。クレバスがあっち、こっちに、走っているので避けながら右左と、巨大迷路を歩くようにルートを探しながら下る。

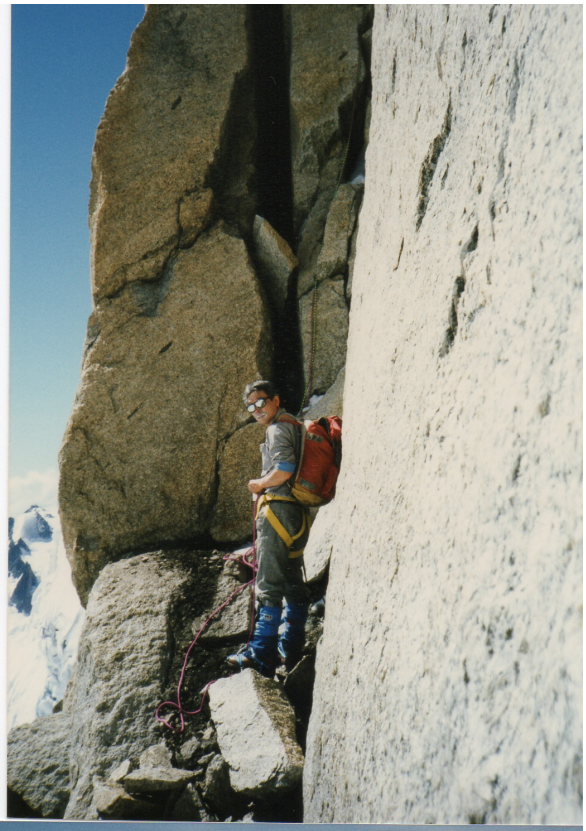
登山電車のモンタンベールの登り返しがきつかったが、花がいっぱい咲いていた。今日の山行は今までの山行で一番素晴らしい山行の様な気がする。

登山電車でシャモニへ下る。飲んだ『生ビヤ』の味は一生忘れないほどうまかった。

出会う。又、プランプラからパラパンドをやっている人もいて、なかなか賑やかである。私達は、ラック・コーヌを目差す。今度はゆるやかな上りである。向かいのモン・ブラン山群の雪と氷河とは



プラン針峰縦走



ダン・デュ・ジュン

ルカン小屋

プラン氷河に下降してプランの登りになる。岩場をスタカットで下降する。外人さんから、バナナとチョコレートを貰う。後藤が「どウェーのマークを見つけた。

プランプラで乗換えブレヴァンへ。全くこちらのロープウェーの技術はすごい。あっという間に到着。標高2525mの展望台へ。

あっモン・ブラン山群が！絵入りの地図と見比べる。あれがモン・ブラン。その手前がドーム・デュ・グーデ。苦しかったグーテ小屋までの急斜面。素晴しい展望に目を奪われる。毛利は盛んにシャッターを押すが、私は、しっかりと脳裡に焼き付ける。ここにはカフェがあったが、早朝の為閉まっていた。「しまった！逆コースにすれば良かった！モン・ブランを眺めながら、ビールが飲めて最高だったのに…。」等と、原稿を書きながら思ったりして…。

行ってみないとわからない。日本では、どこでもビールが買えるのだが、そうはいかなかった。

ハイキング道はよく整備されていて、とても歩き易い。標識もたくさんある。モン・ブラン、モンテローザに標識がなかったのは、ガイド職の為なのだろう。標識があれば、道を間違えることもなかっただろうに…。

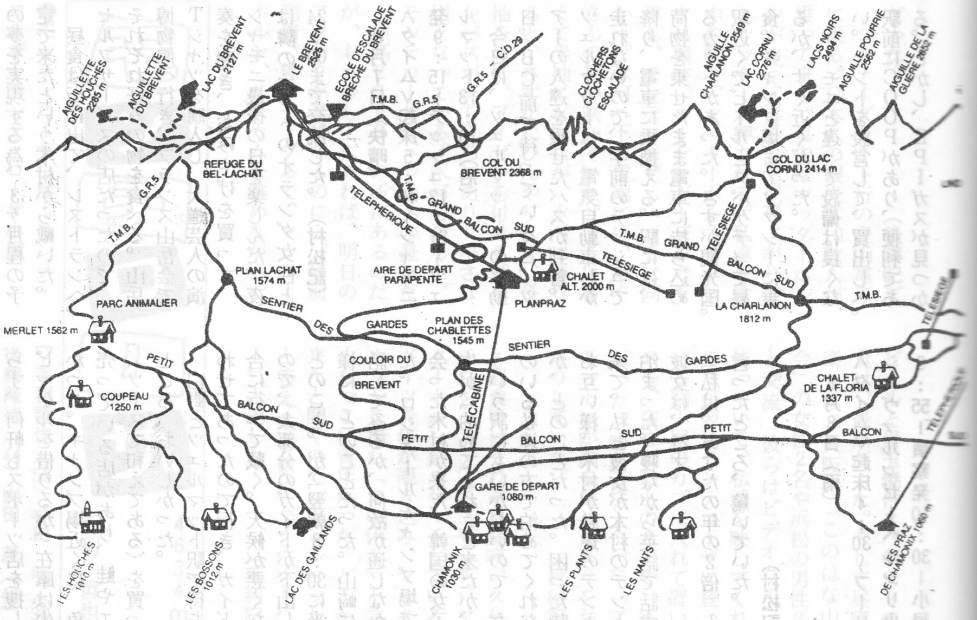
プランプラの方へ下って行くと犬を連れた家族連れなど、次々と出会う。又、プランプラからパランパンドをやっている人もいて、なかなか賑やかである。私達は、ラック・コーヌを目差す。今度はゆるやかな上りである。向かいのモン・ブラン山群の雪と氷河とは全く対象的で、日本の夏山の様に、草の緑と色とりどりの花とが、とてもきれいである。日本でも見られる花、全くない花、毛利は、次々とシャッターを押す。

コル・ド・ラックコーヌに着いた。丁度ランチタイムだったので、家族連れ等数グループが、お弁当を広げていた。私達も同様に休憩した。中田が忘れたピザと厚切ハム、バナナを食べる。最初行動食はフランスパンだったが、ピザが食べ易くておいしい。

全くこちらの人は、フランスパンをよく食べる。あの長いパンをむき出しのままザックに入れてあったり、かじりながら歩いたりしている。ホテルや山小屋での朝食は、フランスパンにバター、ジャム、チーズとコーヒーか紅茶で、これが普通の様だ。こんな食事でよくあの様に速く歩けるのか不思議な気がするが、身体は大きいし構造的にも違うのだろう。

カウベルの音がだんだん近づい

3人で一杯だ。メール・ド・グラス側は数100m一気に落ち、ちょっと気の弱い人では失神しそうな感じだ。もちろん展望は素晴したイーストツアーの山崎に、電話をかける為、私は先にBCを出発した。キャンプ場入り口の電話ボックスでかけてみるが、つながさて、毛利は、後を見るが、姿なし。途中で会うだろうから、戻ってみる。かなり歩いてやっと出会った。ブレヴァン行のロープ



て来る。牛かな、と思ったが「メエメエ」の声。黒い山羊がやって来て、休憩している人達に近づいて、食物のおねだりをしている。私達の方にも来たが、食べられる物はもうなかった。毛利が、バナナの皮をやってみたところ、食べてしまい、又どこかへ行ってしまった。

眼下には、ラック・コーヌがあり、少し下って行くと雪があったが、再びコル・ド・ラックコーヌに戻り、ラ・シャラヌーンに向かう。時間があったら、ラ・フレジェールの方へ行こうか、と思っていたが、やめにした。

暑くて暑くて、喉が渇いた。早くビールが飲みたい。途中の湧水で喉を潤す。

やっとロープウェー駅前に着いた。みやげ物店、カフェバーがあり、人々で賑やかだ。ビールで乾杯。厳しいモン・ブランに登れた感激と、モン・ブランを眺めながらののんびりハイキングも良い。幸せを味わいながら飲む。

又行きたい。この次は、逆コースで。ラック・ブランへも…。

（村松記）

夜「さつき」で食事をしながらマッターホルンについて打合せ。いろいろ考えたが、全員登頂するにはパーティーを2つに分け、毛利、村松はガイド付きで登る事を提案。しかしどうもツェルマットではガイドが確保出来そうにもない。確実なのはシャモニから行ってもらうのが良い。白野もハッキリしないので、ツアーのガイドの山崎でどうかと相談する。

毛利が酔って訳の分らない事をネチネチと言っている。どうも先日来何かにつけて絡む。いろいろな人間が限られた状況の中で生活するので当然多少のゴタゴタはある。グズを言いたければハッキリ言い、後はスッキリする事だ。彼は「隊長」としての立場を忘れてしまったのだろうか。

「毛利さん、いいかげんにしてよ！」村松が突然言った。温厚な彼女が怒ったのだ。皆も驚きあ然としている。それで毛利も目が覚めたのかシャンとしてくれた。結局、山崎には明日キャンプ場に来てもらい詳しい説明をしてもらう事になった。

（後藤記）

8月6日（快晴）

今日は洗濯機が空いていた。専用のコインに替える。乾燥機のコインは、動めを辞めて若い頃からの夢を実現する為、3ヶ月程の予定で来たという木村から戴いた。

昼食は街に出て、レストランへ。セルフサービスの店だったので、それぞれ好みの物を食べる。山岳博物館へ行き、フランス山岳会でTシャツを購入し、大道芸人の演奏を聞き、おみやげを買って、シャモニ最後の日を楽しんだ。夜は隣のテントのオランダ女性と24：00まで交流した。（村松記）

8月7日（快晴）

＜タイム＞起床5：40～シャモニ発9：15～テッシュ12：21～ツェルマット13：10（泊）

今日は、ツェルマットへの移動日。BC前で待っていると、ツアーの人達を乗せたバスが到着。ツェルマットは、電気自動車しか走れないので、手前のテッシュで降り、電車に乗換える。駅には、荷物を乗せたまま電車に持ち込めるカートがあった。さすが観光国。駅近くでビールとスパゲティで昼食。キャンプ場までタクシーに乗るが、すぐ近くだった。

シャモニと違って設備は良くない。テントを設営して、買出しへ。駅前にCOOPがあり、便利である。しかし、EPIガスが見つからず、何軒もスポーツ店を捜した。ピッケルを借りるが、在庫は少なかった。キャンプ場近くに、魚を売っている店があり、鮭やエビ（ソースで和えてある）を買ったところ、おいしかった。

白野とツェルマット駅で待ち合わせてあったので行き、ガイド組合に行って戴く。天候が悪くなるので、大部分のガイドが下山したとのこと。が、「翌朝8：30に来る様に」とのことだった。山崎に電話してみるが、何故か通じなかった。ロジェールキャンプ場で出会った木村が来た。韓国の女子大生が、「泊めてくれ」と来たが、そういう訳にもいかないので、女性のいる私達の方で泊めてくれないか、とのことだった。困った時は、お互い様。木村が私達のテントに来て、私と彼女が木村のテントに泊まった。寝ながら英語で話す。彼女は、21才。

「私は、あなたの年の2倍」と、言ったところ、驚いていた。

（村松記）

8月8日（雨）

＜タイム＞起床4：30～フーリ～シュヴァルッゼーヘルンリ小屋9：55－偵察発10：30－小屋着11：15～下山12：50～ツェルマット15：00（泊）

昨夜は随分暖かだった。天気は下り坂でマッターホルンは霧の中だ。とにかく出発。ロープウェイ

いのでゆっくりは出来ない。隊長とも相談し、少々天候が悪くも行動出来る山に移動を決め、後髪を引かれる思いで下山。夜はチャイナレストラン「春華園」で夕食をだった。

（後藤記）

ゴルナーグラート行の登山電車に乗る。日本人の観光客10数人が、乗って来た。真白なマッターホルンが見える度、喚声が上がり、ビールと目玉焼付スパゲティの昼食は、最高だった。そして昼寝を楽しみ、大阪の「このはな山の会」の女性2名や浜松の男性2名と交流。彼らはビデオカメラを

幸せを味わいながら飲む。
又行きたい。この次は、逆コースで。ラック・ブランへも…。
（村松記）

夜「さつき」で食事をしながらマッターホルンについて打合せ。
（後藤記）

8月6日（快晴）
今日は洗濯機が空いていた。専用のコインに替える。乾燥機のコインは、勤めを辞めて若い頃から食。キャンプ場までタクシーに乗るが、すぐ近くだった。
シャモニと違って設備は良くない。テントを設営して、買出しへ。駅前にCOOPがあり、便利である。しかし、EPIガスが見つかった。
（村松記）

8月8日（雨）
＜タイム＞起床4：30～フーリ～シュヴァルッゼー＜ヘルンリ小屋9：55－偵察発10：30－小屋着11：15～下山12：50～ツェルマット15：00（泊）
昨夜は随分暖かだった。天気は下り坂でマッターホルンは霧の中だ。とにかく出発。ロープウェイ駅に行くと日本人の子供スキーチームに会う。シュヴァルッゼーに着くと、今にも泣きだしそうな空から雨が降って来た。少し待ち出発。歩き易い道をグングン登ると簡単に小屋に着く。ここには下にヘルンリ小屋と上にベルベデール小屋がある。上の小屋に入り少し待機してヘルンリ稜の偵察に行く。ソルヴェイ小屋に緊急外で泊まらないようにとの日本語の看板があった。マッターホルンの出だしはいきなりロープクライミングで始まった。ガラガラの累卵の東壁を行く。幾組か下山してくる。日本人がいたので声を掛けると、悪天候でソルヴェイから下山してきたとの事。ルートが難しくて、登りと下りでは違うルートになってしまったと苦笑していた。30分程登ると、雷がゴロゴロ鳴りだす。これ以上は無用なので急いで下る。小屋に戻ると雨もひどくなる。天気予報を聞いてみると「明日は駄目」「2～3日しないと良くならない」の返事。もう日程に余裕がないのでゆっくりは出来ない。隊長とも相談し、少々天候が悪くも行動出来る山に移動を決め、後髪を引かれる思いで下山。夜はチャイナレストラン「春華園」で夕食をとったり、ピアノバーで大騒ぎしたり、かなり「散財」してしまった。しかし、ミーティングでは、明日もしマッターホルンの壁の状態が良ければ、後藤、山田はもう一度マッターホルンにアタック。毛利、中田、村松はモンテ・ローザに行く事を確認した。私と山田はあくまでマッターホルンを登りたかった。
（後藤記）

8月9日（曇のち晴）
＜タイム＞起床5：00～ツェルマット～ローテンボーデン8：40～50－モンテ・ローザ小屋11：20（泊）
雨は夜半に上がったが、マッターホルンは新雪で真白だった。近くにいた日本人と意見交換するが、一様に2～3日は無理、止めた方が良いとの事。日数が無いので足止めは痛い。全員でモンテ・ローザをめざす。韓国女子大生ともお別れで、記念写真を撮る。振り返り手を振るとベソをかきそうだった。
（後藤記）

ゴルナーグラート行の登山電車に乗る。日本人の観光客10数人が、乗って来た。真白なマッターホルンが見える度、喚声が上がり、シャッターが押される。私達も途中の駅で、マッターホルンをバックに撮す。ローテンボーデンで下車し、モンテローザヒュッテに向かう。氷河へ下る道端には、たくさんの花が咲いていた。ここは暑くて半袖になったが、氷河に降りると、さすがにひんやりして、長袖を来て、アイゼンを付ける。クレバスがあちこちにあり、小さな川となっている。氷河を渡ると、モンテローザヒュッテへの登りだ。
標高2795mの所にあるのだが、もう少し上にあれば、明日のアタックが楽になるのに…。昼前到着。外のテーブルで、マッターホルン、リスカムを眺めながら、ビールと目玉焼付スパゲティの昼食は、最高だった。そして昼寝を楽しみ、大阪の「このはな山の会」の女性2名や浜松の男性2名と交流。彼らはビデオカメラを持っていて、私達を映してくれたのだが翌日モンテローザに登っている間小屋のカゴに入れて置いたのを、盗まれたとのことで、残念だった。時折良く太った「マーモット」が顔を見せ、エサをおねだりしていた。
（村松記）

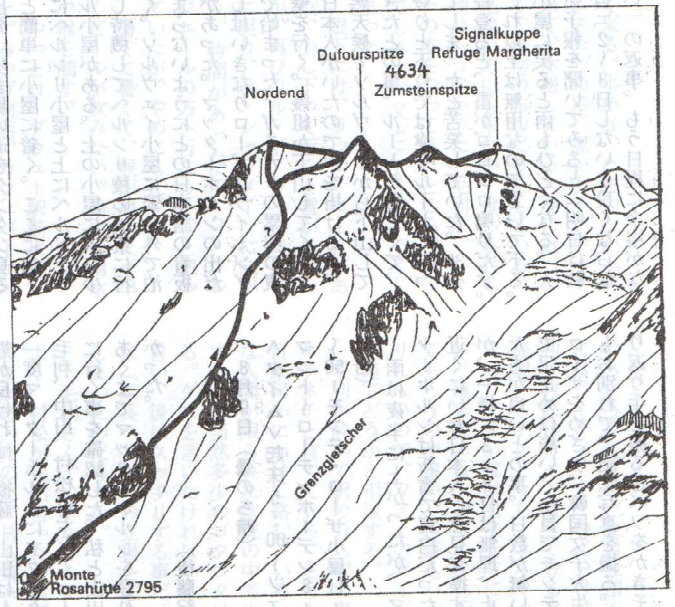
昼食後はそれぞれ昼寝、スケッチなどでのんびり過ごす。マッターホルンをスケッチしていると、ドイツ青年が覗き込み、マッターホルンを指し「あの山か」と言う。人なつこい青年だった。どこから来たと聞くので「ツェルマット」と答えると彼は「ヅェズトバット」と返した。
（毛利記）

モンテローザ

4634m

毛利　哲也

●モンテ・ローザ小屋～モンテ・ローザ～モンテ・ローザ小屋
▽91年8月10日（快晴）
▽毛利哲也（58）中田　明（30）
後藤隆徳（44）山田　茂（47）村松美喜代（42）



▽標高差＝1800m
▽タイム▽起床1：00～出発2：05－モンテ・ローザ北峰（4600m・後藤、山田、村松）11：45－モンテローザ（デュフォール・シュビッツェ・毛利、山田）12：20－モンテ・ローザ小屋15：50－16：50（後藤、山田、村松）（毛利、山田）（泊）

1時に起床するとすでに出発するパーティーもあった。朝食は、パン、バター、ジャム、チーズ、紅茶の簡単なもの。ヘッドランプを頼りに、大きな岩をまいたり、乗越したり岩尾根（モレーン）を行く。2時間弱でモンテ・ローザ氷河の舌端に着く。ここでアイゼンを着けザイルを結ぶ。オーダーは、後藤、村松、山田と毛利、中田。暗い氷河をただひたすらに進む。登山者は約100名。あちこちでヘッドランプが光る。中には右側のグレンツ氷河を登っているパーティーもあるが、リスカム（4527m）を目指すのか。

単調な大雪原の氷河を登る。天気は快晴無風気温も高い。そのためかとにかく「ネムい、ネムい」の連続で何となくフラフラと歩いている。それでもようやく朝日が出るとその先に急勾配の雪稜が見えた。最初の斜面をトラバース気味に左登する。ここから右へ急の雪稜を300m直登。かなりいやらしく、一昨日の20cm位の新雪の下はガヂガヂの固い氷である。慎重に登る。村松も頑張る。時々後藤にザイルを張られ、早く登れと促される。主稜線に出ると前方に顕著なピークが現れた。手前がものすごい雪壁で登山者が蟻のように張りついている。あれが頂上と思ったが実はまだ先があった。

浜松の2人はこのイヤらしい所でザイルを結んだ。ショッパイ所で彼らの先に出る。両側は下の氷河まで1000mもある程のやせたやせた雪稜。その先にまた岩稜帯が待っている。（毛利記）

ドームピークに立ったが頂上はまだ岩稜の向こうだった。ここから岩場で下山、登山者の往来がままならず時間が掛りそう。浜松隊はここで、諦めたらしく「帰るか」と言っていた。もっとも後で貰った報告書には「登頂した」とあったが時間の明記もなく真偽は不明だ。このまま行くと全員登頂出来ない可能性があるので毛利、中田に先行してもらう。私も山田も当然行きたかったが、毛利はフランスでミディ～プラン縦走ができなかったのでその代りと思い私が提案した。山田も快く了承してくれた。村松は既にバテバテで屈み込んで下を向いている。放っておけばいつ落ちるか分らない。モンテ・ローザは厳しいと聞いていたがやはりちょっと無理だったか。私の見込みも甘かったかもしれないが、登る前から駄目も言えない。いずれにしても登りに時間が掛り過ぎた。11時45分、頂上を形成する約4600mの最後のピークに立つ。一度下って登ればすぐ頂上だった。毛利達が登っているのが良く分るが、狭い岩場に下る人、登る人でごった返している。山田と相談し下降を考えるとこれ以上は無理と判断しここまでとする。

富士山でいえば剣ヶ峰でなく富士宮口頂上で終りにする様なものだと思った。それでもけっしてこの登山が色褪るものにはならないだろう。そう自分にいい聞かせるし[illegible]。（後藤記）

につけ記念撮影。360度の大展望。マッターホルンが小さい。感激もひとしお、このうえなし。

下降は大岩にザイルを回して懸垂下降。先行のドイツ青年2人が遅いのでイライラ。時間が気になまでヒドンクレバスに落ちて生きた心地はしなかった。我々はなるべくザイルを長くとり、一緒に落ちない様に工夫して下った。朝アンザイレンしたモレーンの安全地帯まで下ってザイルを外す。小屋[illegible]

う思って先に下った。（後藤記）

氷河が終わり、岩稜帯となる。ホッとしたし、疲れてきたので、ゆっくり歩きたくなって、「先に行って下さい。」と言い、ゆっく[illegible]り下山。間もなく二人の姿は見え[illegible]

ーモンテローザ（デュフォール・シュビッツェ・毛利、山田）12：20ーモンテ・ローザ小屋15：50（後藤、山田、村松）ー16：50（毛利、山田）（泊）

を頼りに、大きな岩をまいたり、乗越したり岩尾根（モレーン）を行く。2時間弱でモンテ・ローザ氷河の舌端に着く。ここでアイゼンを着けザイルを結ぶ。オーダーでザイルを結んだ。ショッパイ所で彼らの先に出る。両側は下の氷河まで1000mもある程のやせたやせた雪稜。その先にまた岩稜帯が待っている。（毛利記）

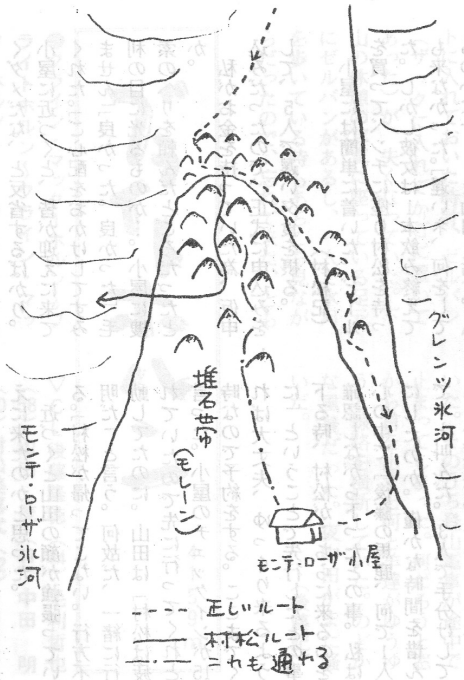
富士山でいえば剣ヶ峰でなく富士宮口頂上で終りにする様なものだと思った。それでもけっしてこの登山が色褪るものにはならないだろう。そう自分にいい聞かせるしか術はなかった。（後藤記）

大きな岩峰が5つ位ある。その先が頂上か。岩の突起にザイルを巻いて確保する。前に幾パーティーもつながり順番待ち。大阪「このはな山の会」3人も前にいる。頂上のピッチで中田が先行するが声が届かない。30分以上も待つ。北峰に後藤パーティーが着く。待ち時間、帰りの安全を考慮し、ここまでと連絡を受ける。高度は4600mを越えている。後藤の声援を受け、彼等の分まで何としても頂上へとファイトが湧く。左側に大きく回り込み、ルンゼ状の雪壁を20m直上。最後のピッチは中田が毛利にトップを譲る。取付は3mの垂壁、その上が20mの雪壁。これを乗越せば頂上。2回程手こずったが一気に頂上に立った。続いて中田も。大阪労山パーティーとも感激の握手。彼等は下る。頂上には私と中田しかいない。色白のマリア様が優しくおごそかに佇んでいる。労山旗をピッケルにつけ記念撮影。360度の大展望。マッターホルンが小さい。感激もひとしお、このうえなし。

下降は大岩にザイルを回して懸垂下降。先行のドイツ青年2人が遅いのでイライラ。時間が気になる。しかし、慎重に。確保は岩にザイルを回す。慣れてくるとかなりスムースにいく。岩峰（稜）帯を越えて、急な雪壁は2ヶ所ピッケルを支点にして確保しながら下る。ここからはトラバース気味に大雪原めがけて一気に下る。下でザイルを外して（編者注・この行為は非常に危険）行動食を口にして「ホッ」とする。この分なら、17時前に帰れるだろう。アンザイレンもせず氷河の恐さも知らずグングン下る。先行パーティーを追い越した時、ガイドらしき人に「○×△□▽□○××！」（ここは氷河だ。いたる所にクレバスが有る。落ちたらどうする。命が惜しくないのか大馬鹿野郎＝毛利訳）とひどく怒鳴られた。（毛利記）

モンテ・ローザ氷河の舌端までくると、いたる所にクレバスが口を開けていた。来る時は暗くて分らなかったが、午後気温が上り開いた様だ。時々片足がズボッと股までヒドンクレバスに落ちて生きた心地はしなかった。我々はなるべくザイルを長くとり、一緒に落ちない様に工夫して下った。朝アンザイレンしたモレーンの安全地帯まで下ってザイルを外す。小屋はここから「左」に下って「左」にあるグレンツ氷河沿いに行けば30分で着く。快晴無風日没まではまだ相当時間があった。

「先に行って下さい」村松は疲れているらしくそう言った。少し下れば小屋は見える。「大丈夫だろう」私と山田は何の疑いもなくそう思って先に下った。（後藤記）



氷河が終わり、岩稜帯となる。ホッとしたし、疲れてきたのでゆっくり歩きたくなって、「先に行って下さい。」と言い、ゆっくり下山。間もなく二人の姿は見えなくなってしまったが、ケルンを頼りに歩く。「あれ！真暗でよくわからなかったが、確か岩はもっとゴツゴツした所だったはず…。間違えた！」そう思った途端、混乱してしまった。小屋はどこだろう。見当たらない。でも、小屋は氷良く分るが、狭い岩場に下る人、登る人でごった返している。山田と相談し下降を考えるとこれ以上は無理と判断しここまでとする。

河の上にあったのだから、氷河に行けばわかるはず…。氷河は右側にある。そして岩稜は？何だか随分遠いけれど、あんなに歩いたのかしら？ますますわからなくなってしまった。夢の中にいる様な気がした。

3本の岩稜帯が下の方に向かっている。まず右側に行かなければ…。時々崩れ落ちる岩を登り、下ろうとするが、下の方に湖の様に水がたまっている。下ってから渡れなかったでは困るので、やはり上から行こう。又、岩を登り、氷河に下りる。氷河には旗が立っていたから、旗を捜せば良い。上の方に行けば、良く見えるだろう。

それから氷河を登って行く。飲料水が終っていたので、氷河の解けている水を、すくって飲む。かなり上まで行ったが、旗は見当たらない。変だな、と思いながらもゴルナーグラートから先に延びている岩稜帯目ざして、再び氷河を下っていた。人が歩いた様な跡があったので、それを頼りに歩く。

時々クレバスがあり、落ちない様に気をつける。落ちたら、それこそ大変。皆、クレバスに落ちたか、岩場で足を滑らせて動けなくなっているのだろうか、と心配しているだろうな。夕方になり、冷えてきた。ヤッケを着て、アイゼンを付ける。暗くなるのはかなり遅いから、明るいうちに帰れる、と信じている。しかし、1割は「私もこれまでか！」という思いがした。と、「オーイ」と、遠くで人の声。捜しに来てくれたのだ！

「後藤さーん、山田さーん、中田さーん、毛利さーん」と、皆の名前を呼んだ。岩の上に人の姿が。

手を振るが、わからない。再び呼ぶ。こっちを向いた。気がついた。近づいてみると、中田だった。「小屋はこちらですよ」「え、本当」と私。「よくわかりましたね」「登山道でない所を歩いている人を見かけたから、こっちの方に来てみた」と、中田

ありがとう。私はとんでもない所を歩いていたのだ。間違えた時の鉄則、元に戻ってみることをしなかった。戻っていれば、毛利達や他の登山者に会えたかもしれない。天気も良いし、見通しも良い。「何とか行けるだろう」と思った。しかし、間違って思い込んでしまったこと、マッターホルンが変更となり、地図を持っていなかったこと、標識が何もない。――自分では、割と冷静だと思っていたのだが、パニック状態になると全くダメだな、と反省するばかり。小屋に近づくと、皆が迎えに来てくれた。「ご心配をおかけしてすみません」「良かった。良かった」毛利の目に光るものが…。小屋に捜索のヘリを頼んだところだったとか。

私がお金を持っていた為、仮申込みだったので、正式に申込みをして、5人で遅い夕食を摂る。

（村松記）

小屋には簡単に着いた。ビールを買ってベンチに座り村松を待った。しかし彼女は1本飲み終えても来なかった。「遅いネ、何をしてるのかなナー」と山田と話す。私は「ビールが温くなる」と口実を作って村松の分を口にした。それが終えても彼女はまだ来ない。「変だ、おかしい」酔いはどこかへ飛んだ。下ってくる人に聞いても分からない。とにかく捜してみようと靴をはいた。

（後藤記）

ゴロゴロの岩稜を下る。左側の氷河に沿って、登る時は暗くて良く分らなかったが、大きな岩や石を縫う様に下る。中田が「下り過ぎないか」と心配する。下の方から山田の声がした。私は山田が迎えに来たのかと思った。

近づくと山田の顔が強張っている。「村松が帰ってこない。行方不明だ」と言う。何故だ、一緒に行動してたのに。山田は「村松は疲れていたので先に行ってくれと言った。小屋のチェックインが15時なので予約をする。ここまでくれば大丈夫、ゆっくり来るように」ということで先行したとの事。下る時、村松がこちらに来るのを確認しながら下ったとの事。私は心の中で「後藤の馬鹿、何で1人にしたのか。僅かな時間を惜んで」と叫んだ。3人で手分けしてもう一度捜す。分かれた所まで山田、中田は右側（モンテ・ローザ氷河）を、後藤も中央のモレーンから登って来た。毛利、後藤一旦小屋に戻り前後策を協議する。「このはな山の会」滝上に相談し、小屋の主人にも報告する。ところがドイツ系の人で英語が全く駄目だった。「ミキヨ・ノウ・カムバック」も通じない。一緒にいた日本青年が「翻訳器」を持っていたので、それで理解してもらったり、滝上のアドバイスで「図と絵」を描いて説明したが目が悪くて今ひとつハッキリしない。結局小屋の娘が英語を独語に直して何とか事情を理解し、ヘリコプターをすぐ飛ばすところまで話しが進んだ。

後の連絡は滝上に頼み、前出の日本青年の協力を得て明るいうち大写真で捜し、現場を確認する方法を確立している。（毛利記）

遭難や事故は予想外な事で起る事が多いが、この行方不明も典型

8月11日（快晴）

ハタイム▽起床6：30－出発7：45－ツェルマット11：10（泊）

部屋の窓を開けるとマッターホルンが目の前に。丁度頭の中の絵思えない。とにかく、手元に置くに限る。

ツェルマットに戻り、大阪このはな山の会の人達が泊まっているホテルバンホフへ行き、シャワー

あったので、それを頼りに歩く。

時々クレバスがあり、落ちない様に気をつける。落ちたら、それこそ大変。皆、クレバスに落ちたか、岩場で足を滑らせて動けなくなっているのだろうか、と心配しながら。そしてCOOP近くのコインランドリーで洗濯をした。使い方がなかなかわからず、困った。

（村松記）

ローテンボーデンから登山電車で下ってくると草原に沢山の羊がいた。そのうち登山電車が途中で止まってしまった。何だろうと窓から首を出すと何と羊達がゆうゆうと線路を横断していた。のどかな風景だった。夜中田がまた騒いだ。

（後藤記）

娘が英語を独語に直して何とか事情を理解し、ヘリコプターをすぐ飛ばすところまで話しが進んだ。

後の連絡は滝上に頼み、前出の日本青年の協力も得て明るいうちにと再び捜しに行く。そうしたら小屋を出て数分の所で上から下りてくる中田、村松を確認した。毛利はすぐ小屋に戻り、主人に「ミキヨ・カムバック・サンキュウ」と知らせる。「このはな山の会」見ず知らずの日本青年、小屋の主人、皆さんありがとう深く感謝する。

村松は感違いして「右側」の氷河に入り込み、氷河を渡った先に小屋があると思ったとの事。いずれにしろ大事にならず「ホッ」とした。明日はゆっくり起きて、氷河を渡って登山電車に乗ればツェルマットだ。この山行は、登山電車、高山植物、氷河渡行、大雪原、急勾配の雪壁、やせた雪稜、4000mの岩峰（稜）帯、雪岩壁の直登、そして行方不明騒ぎと、いずれも初めての体験、思い出多き良き山行であった。

大阪「このはな山の会」のアドバイス。①言葉が通じない時は、絵、略図を描いて説明すれば良い。②スイスでは行方不明になった時、ヘリで現場付近の写真を撮り、拡大写真で捜し、現場を確認する方法を確立している。

（毛利記）

遭難や事故は予想外な事で起る事が多いが、この行方不明も典型的な例だった。99％下降は終了していたが残り1％に落し穴があった。私にしてみれば何故あんな所でと思っても現実にそこで事故はあった。私が思っていた程村松は地形の把握が出来ていなかったのだ。国内でも以前白馬岳、常念岳でも似た様な事があったが、いずれも暗い内の出発で帰着地が理解されていなかった。原因はいろいろあるだろうがやはり「連れていく立場」と「連れられていく立場」の山に対する姿勢の違いがそうさせたと思う。逆をいえば「連れていく立場」の人は「連れられていく立場」の人を過信せず、最後の最後までフォローするという事だ。いずれにしてもひとつ間違えば大事故につながるところで、私の判断は極めて甘かった。ここでも自分の尺度でものを見る悪いクセが出ている。多数の関係者に迷惑をかけ、リーダーの資質を問われても返す言葉はない。

（後藤記）

8月11日（快晴）

＜タイム＞起床6：30－出発7：45－ツェルマット11：10（泊）

部屋の窓を開けるとマッターホルンが目の前に。丁度額の中の絵の様で、後藤が写真に撮る。昨夜、今朝の食事を分けてもらい、廊下の棚の上に置いておいたのだが、オレンジが不足していた。海外旅行では盗難が多いので、注意が必要なことは常識であるのだが、こんな物まで…と驚いてしまう。浜松の人のビデオカメラもそうであるが、私も、登山シャツのポケットに入れておいた時計、ゼルバン（ザックに入れてかごに置いてあった）が、失くなっていた。下山の休憩の写真に座っている足元にゼルバンがあるし、一人で氷河を歩いている時もあちこち見ながらだったので、忘れて来た、とも思えない。とにかく、手元に置くに限る。

ツェルマットに戻り、大阪このはな山の会の人達が泊まっているホテルバンホフへ行き、シャワーを借りる。キャンプ場のシャワーは氷河の水の様に冷たいそうだから。

ゴロゴロの岩稜を下る。左側の氷河に沿って、登る時は暗くて良く分らなかったが、大きな岩や石を縫う様に下る。中田が「下り過ぎないか」と心配する。下の方かあったので、それを頼りに歩く。

時々クレバスがあり、落ちない様に気をつける。落ちたら、それこそ大変。皆、クレバスに落ちたか、岩場で足を滑らせて動けなくなっているのだろうか、と心配しながら。

「何とか行けるだろう」と思った。しかし、間違って思い込んでしまったこと、マッターホルンが変更となり、地図を持っていなかったこと、標識が何もない。――自分では、割と冷静だと思っていたク」も通じない。一緒にいた日本青年が「翻訳器」を持っていたので、それで理解してもらったり、滝上のアドバイスで「図と絵」を描いて説明したが目が悪くて今ひとつハッキリしない。結局小屋の

ブライトホルン

4159m

●クライン・マッターホルン～ブライトホルン～クライン・マッターホルン

▽8月12日（晴）

▽CL後藤隆徳（44）毛利哲也（58）山田　茂（47）中田　明（30）村松美喜代（42）

＜タイム＞起床6：00～クライン

モンテ・ローザ登山

'91 8 10

'91 8 10

・マッターホルン発8：35－ブライトホルン10：07～20－クライン・マッターホルン：～ツェルマット13：10（泊）

クライン・マッターホルンに着くと、スキーヤーが颯爽と滑っていた。若い頃には、山よりもスキーに夢中だった私にとって、ここまで来ているのに、スキーをしないで帰国するのは、残念だな、などと思ったりして…。

でも山頂で、マッターホルンを初め、最後のヨーロッパアルプスを眺めていると、感無量の思いがした。軽い登山の為か、皆リラックスしている様で、イタリア人からチョコレート等を戴いたりして交流。

ピッケルを返しに行ったが、借りた時の券をどこに入れたのか見当たらない。計61SF請求されたが借りた時、既に50SF払ってある為その旨言う。控えの台帳に後藤の名前で載ってなく、村松で登録してあったことが判り、"sorry"と謝る。

買物に出かけると、ツェルマット駅前で、白野に出会った。トレッキングのお客さんを案内して来たところとか。私も、マッターホルンは中止して、モンテローザに行ったことを伝える。私の友人に「ヨロシク」との伝言を承る。

彼女は若い頃、シャモニであちこち案内してもらったようだ。

白野には、多くの日本人が、お世話になっている様子。ツェルマット最後の打ち上げはワインとステーキ。魚料理はメニューを見ても分からない為、結局ステーキとなってしまう。ワイン同様肉料理は安くておいしい。だが、私はまだ「チーズフォンデュ」を食べていなかった。明日こそ食べよう。

2次会は、先日楽しかったピアノバーへ行くが休みで残念だった。ツアーの人達に会ったのでビールで乾杯。（村松記）

8月13日（晴）

〈タイム〉起床　：　～ツェルマット発　：　～テッシュ発　：　～チューリッヒ　：　（泊）

テントを撤収し、余った食料等を日本人にあげて、ツェルマット駅へ。時間があったので、駅前の喫茶店に入り、コーヒーを飲む。

ビールとワインが多かったので久しぶりのコーヒーを、店内を眺めながら、ゆっくりと味わう。

テッシュからは、冷蔵庫、トイレ付のバスで、チューリッヒへ。

ホテルは、賑やかな駅の近くにあった。シャワーを浴び、洗濯物をベランダで干していると、山田達が外で待っていた。隣に教会があり、見学し、写真を撮る。

ステンドグラスや彫刻など中世の芸術が素晴しい。街の見学をする前に、両替をする為駅の地下街へ。地図を片手にキョロキョロしていると、「Can I help you?」と声をかけてくれた年輩の婦人に、両替をしたい旨伝えると、案内してくれた所に、自動両替機があった。外国で親切にして戴けるのは、本当に嬉しい。

シャモニにも多かったが、レストランの戸外で、テーブル、イスを並べて、街行く人達を眺めたり、大道芸人の音楽を聴いたりしながら、ビールを飲んだりしている。何ものどかである。笑い声に、何だろうと思ってみると、パントマイムをしながら、通行人に

村松とジャズを聞き帰ると毛利、山田と会う。山田から中田に胸ぐらを掴まれ殴られそうになったと聞く。レストランで食事を摂れなかったのが原因らしい。全くヨーはアッという間に雲の下だ。サヨナラ私達のヨーロッパ・アルプス。良い思い出をありがとう。私は1人感傷にふけていた。（後藤記）

—文中敬称略—

ト駅前で、白野に出会った。トレッキングのお客さんを案内して来たところとか。私も、マッターホルンは中止して、モンテローザ

大道芸人の音楽を聴いたりしながら、ビールを飲んだりしている。何ともものどかである。笑い声に、何だろうと思ってみると、パントマイムをしながら、通行人にちょっとイタヅラをして、何ともユーモラスな光景。

中世の建物が残る街を見学していると、北海道の人達が食事しているのを見かけ、私達も入る。生バンドの演奏を聞きながら、スペイン料理を食べる。後で気がついたのだが、この時、ツェルマットで買ったばかりの帽子を忘れてきたようだ。テキーラ入りアイスクリームに酔ったかな？

それから大道芸人の演奏を聴いたり、手品？には、毛利も参加して、とても楽しかった。トイレにも行きたくなり、レストランに入る。中田はステーキ、私はチーズフォンデュ、他の三人は飲物を注文。ところが、飲物のみはダメ、向かいのバーへ行く様にとのこと。仕方なく出る。遂にチーズフォンデュは、食べれなかったが、後藤とジャズを聞きに行った。もう1泊できれば、ナイトツアーズ、民謡酒場へ行ったり、遊覧船に乗ったりしたかったのだが、残念。

（村松記）

村松とジャズを聞き帰ると毛利、山田と会う。山田から中田に胸ぐらを掴まれ殴られそうになったと聞く。レストランで食事を摂れなかったのが原因らしい。全くヨーロッパまで来て困った奴だ。ホテルに帰ると山田はもう一緒はイヤだと言い我々の室で寝た。

（後藤記）

8月14日～15日

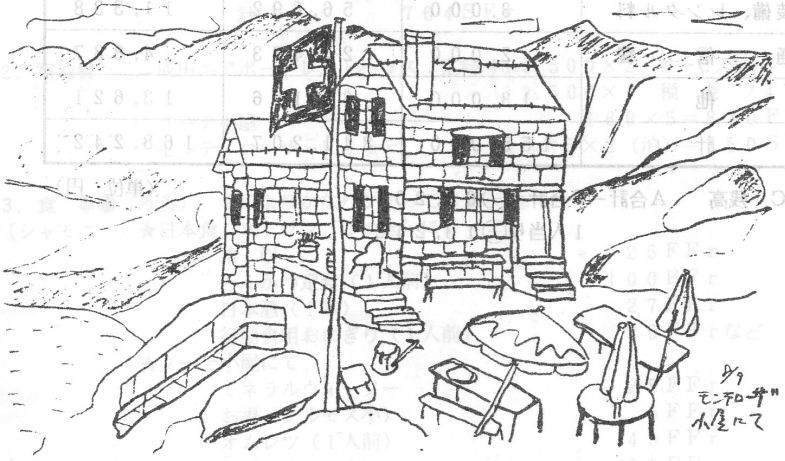
＜タイム＞起床6：00～出発9：00～チューリッヒ発11：58フランクフルト発13：58～ソウル9：40～成田14：15～三島17：05

最初のホテルでの朝食が良くなかったので、昨夜自動販売機で牛乳と桃缶を買ってきたのだが、このホテルは、良かった。缶切を持っていなかったので、ボーイさんに頼む。なかなか持って来ないので、聞きに行くと、「オー」と言ったきり…。「英語通じなかったみたい」と話して食事が終って席を立った時、ツアーの女性のテーブルの上に、何と！桃缶があるのではないか。

（村松記）

ホテルから専用バスで空港に向う。免税店ではツェルマットで買った同型のオルゴールが安かった。飛行機は飛び立った。スイスはアッという間に雲の下だ。サヨナラ私達のヨーロッパ・アルプス。良い思い出をありがとう。私は1人感傷にふけていた。（後藤記）

—文中敬称略—



ヨーロッパアルプス隊会計報告

村松美喜代

A．

準　備　金	5,000×5＝	25,000
イースト・ツアー	365,000×5＝	1,825,000
会　　費	150,000×5＝	750,000
計		2,600,000

B．支出

イースト・ツアー	365,000×5＝1,825,000
準備金＋会費	841,207
計	2,666,207

		予算（1人当り）	合　計	1人当り
交　通　費		39,000	206,752	41,350
宿　泊　費		24,000	108,408	21,682
食　費	（外食）	18,000	200,584	40,117
	（他）	14,000	61,714	12,343
ガ　イ　ド　料		13,000	50,160	10,032
写真、8ミリ代		24,000	25,802	5,160
キャンプ場使用料		5,000	38,556	7,711
装備、レンタル料		3,000	56,692	11,338
通　信　費		2,000	24,433	4,887
他		13,000	68,106	13,621
計		155,000	841,207	168,242

（単位　円）

C．残高　A合計－B合計＝㊀66,207

1人当り㊀13,242

〔内訳〕

1．交通費　東京出張　8,000円
三島～成田　6,670×5×2＝66,700円

〔シャモニー〕
シャモニー～レ・ズーシュ（バス）　8×5＝　40FFr
レ・ズーシュ～ベルビュー（ロープウェー）　29×5＝145FFr
ベルビュー～ニ・デークル（登山電車）　37×5＝185FFr
ニ・デークル～ベルビュー（登山電車）　37×2＝　74FFr
ベルビュー～レ・ズーシュ（ロープウェー）　29×2＝　58FFr
レ・ズーシュ～シャモニー（バス）　12×2＝　24FFr
ニ・デークル～ル・ファイエ（登山電車）　73×3＝219FFr
ル・ファイエ～シャモニー（電車）　23×3＝　69FFr
シャモニー～ミディ往復（ロープウェー）　140×5＝700FFr
シャモニー～ミディ（ロープウェー）　106×3＝318FFr
モンタベール～シャモニー（登山電車）　50×3＝150FFr
シャモニー～ブレヴァレ（ロープウェー）　46×2＝　92FFr
シャモニー～ロジュールキャンプ場（タクシー）　9回　486FFr
（最高　125FFr　最低　25FFr）
※タクシー料金は、人数、荷物量によって違う。チップ　13.5FFr
計　2,573.5FFr

〔ツェルマット〕
テッシュ～ツェルマット（電車）　5.6×5＝　28SFr
シュヴァルツゼー（ロープウェー）(往復)　23×3＝　69SFr
〃　14.5×2＝　29SFr
シュヴァルツゼー～ツェルマット（ロープウェー）　11×2＝　22SFr
ツェルマット～ローテンボーデン（登山電車）　27×5＝135SFr
ローテンボーデン～ツェルマット（〃）　21.6×5＝108SFr
ツェルマット～クライン・マッターホルン（ロープウェー）　44×5＝220SFr
ツェルマット～テッシュ（電車）　5.6×5＝　28SFr

〔チューリッヒ〕
空港～ホテル（タクシー）　40SFr
ホテル～空港（バス）　14×5＝　70SFr
計　764SFr

2．宿泊費　成田エアポートレストハウス　室料（14,500×2　サービス料 / 12,500×1　税　金）47,088円
グーテ小屋　160×5＝830FFr
モンテ・ローザ・ヒュッテ　45×5×2（泊）＝450SFr

3．食　事●（外食）　予定よりかなりかかってしまった。

〔シャモニー〕★日本食レストラン“さつき”にて
冷　奴　25FFr
とんかつ定食（1人前）　100FFr
日本酒（1本）　27FFr
行動食用おにぎり（1人前）　20FFrなど

★グーテ小屋にて
ミネラルウォーター　28FFr
お湯（テルモス小）　5FFr
オムレツ（1人前）　43FFr
缶ビール（1本）　20FFr
コーヒー（1杯）　15FFr

〔ツェルマット〕★レストランにて
ビール（中ジョッキ）　4.2SFr
スパゲティ（1人前）　11.5SFr
★モンテローザ、ヒユッテにて
目玉焼付スパゲティ（1人前）　12.5SFr
缶ビール（1本）　6.5SFr
ワイン　30SFr
★レストランにて打上げ
ビール、ワイン、ステーキなど（5人）　236.40SFrなど
●（日本から持参した食料）
レトルトライス、みそ、ワカメなど　12,517円
●（現地で購入した食料）

〔シャモニー〕
バナナ（5人分）　20.45FFr
厚切ハム（5人分）　70.7FFr
ピザ、フランクフルトパン（5人分）　78FFr
米（1袋）　10.9FFr
ウィスキー　135FFr　など

〔ツェルマット〕
COOPにて　卵（6ケ）　3.50SFr
ソーセージ（1袋）　3.30SFr
ネクタリン（1パック）　3.90SFr
焼豚（640g）　23.05SFr
BC近くの食料品問屋（？）にて　など
ワイン　2ℓ　12SFr

4．ガイド料　マッターホルンに登らなかった為、なしであるが、
フランス山岳会入会金　として
418×5＝2,090FFr　計上

5．写真、8ミリ代　フィルム　9,722円
8ミリ修理　16,080円

6．キャンプ場使用料〔シャモニー〕　801.5FFr（1人1日当り22.9FFr）
〔ツェルマット〕　210SFr（1人1日当り　7SFr）

7．装備、レンタル料　ザイル　17,600円
〔シャモニー〕　ランタン　318FFr
ガスコロン（レンタル）　275FFr
ピッケル（レンタル）5日間　130×2＝260FFr
〃　6日間　150×3＝450FFr
〔ツェルマット〕　EPIガス　12×2＝24SFr
ピッケル（レンタル）　4×4日＝48　61SFr
1×5日＝13

8．通信費　電話、切手　6,851円
コピー　4,630円
〔シャモニー〕　テレホンカード　96FFr
絵はがき（60枚）　145FFr
切　手　3.7×60＝222FFr
〔ツェルマット〕　テレホンカード　20SFr

9．他　渡航手続　4,000×5＝20,00円
成田空港施設使用料　2,000×5＝10,000円
振込手数料　3,090円
陽焼止めクリーム　39×5＝195FFr
洗剤、スポンジ　24.15FFr
コインランドリー　20×2＝40FFr、10SFr
乾　燥　機　4SFr
おみやげ（地図）　12×15＝180FFr、1.5×14＝21SFr
〃　（チョコレート）　計　88.4SFr
TC手数料　6,145円40FFr、2SFr
そ　の　他　5,834
〔1FFr＝24円、1SFr＝92円〕

D．カンパ
15名の方より　合計　60,907円
8ミリフィルム、現像料として使わせて戴きました。
山口さんより　医薬品

装　備　報　告　書

山　田　茂

登山靴	革靴	寒くないのでOK、プラブーツだと暑いかもしれない。現地の人も革靴が多い。
アイゼン(アイゼンバンド)		中田ジョイントビス紛失。毛利片足前部紛失。村松シャフトビス2個山田1個紛失
ピッケル	レンタル	各自持参した方が良かった。2度借りて2度返した、面倒、レンタル料？
登山ズボン		毛利以外はニッカーズボンだった。
セーター		今回は余り使わなかったが、寒いときもあるから持参したい。
手袋	3双	天候に恵まれたので1双しか使用しなかった。2双ぐらいで良い。
雨具		ヤッケ代りに来た、ゴアテックスの良いやつを1枚。サングラス（ゴーグル）
サングラス（ゴーグル）		中田、山田最初の日にノーサングラスで目を痛めた。
予備電池	現地購入	現地購入も良いが、持参した方が良い
行動食	現地購入	店が閉まってると買えない。日曜日午後、昼休みが長い。
非常用、ガスコンロノズル	2	持参。緊急用使用せず。ツェルマットBCにて使用。
ツェルト	2	持参。緊急用、使用せず。
医薬品セット	2	持参必ず使います。目薬に助けられた。
無線機	2	430mz現地では使用してない。緊急用使用せず。
カメラ	3	山田現地購入24000円。
フィルム	1人5本	天候次第で少ない1日1本ぐらい。現地購入値段が高い。
日焼け止めクリーム		現地購入。たくさん使うので各自持参の方が良い。各自1個程。
テルモス	2	寒い日はありがたい。
ザイル9mm40M	3	3人組1本、2人組1本、1本余り2本で良かった。
ハンマー	2	山田、毛利、使用しなかったが持参したい。（ミディ～プラン縦走用）
ハーケン	3	各自使用しなかったが持参したい。（ミディ～プラン縦走用）
スノーバー	2	中田、使用する日にBCに忘れる。（ミディ～プラン縦走用）
パスポート		ツェルマットのBC、ピッケルのレンタルで預けさせられた。
外貨TC	10万位	TCは必ず個人でやるように、シャモニとチューリッヒで日本円両替機有り。
Mテープ、本		ガイドブックを持参して助かる。
ブルーシート	2	工事用、BCにあるものを利用して張る。帰りに置いてくる。
大型ガスコンロ		シャモニでレンタル。1.8kgボンベ小（大と小がある）
大型ザック		帰りに荷物が多いので、100ℓぐらいのが欲しい。
登攀具カラビナ スュリンゲ	各6組	ゼルバン、氷河の上はザイルを結んでアンザイレンする。
ローソク、ランタン		日没が遅いので使わなかった。
EPIガスボンベ		シャモニ、ツェルマット、共に購入する。
ペグ	適量	持参BC地が芝なので必要。

アルプスの思い出

2人のオランダ娘

山田　茂

フランス国立ロジェールキャンプ場に31日、三島勤労者山岳会の5人のパーティーは、ここにテント2張りを雨の降るなか張る。雨はまもなくあがった、夕食後隣のテントの外国人女性2人と交流する。

2人はオランダ人で、名前はアネツとマルレーンだ、近くの山へハイキングに行っている様だ。私が図々しく写真を2人と撮る。

1日高地順応にモンブラン・デュ・タキュルに行った日、帰ってから手帳に名前を書いてもらう。寝る時「おやすみ」、起きて顔を合わせると、「おはよう」とか「グッドモーニング」と気楽に声をかけれる様になる。

2日、モンブラン目指してグーテ小屋泊。暑い小屋の中で、2人はどうしているかなと、ふと思った。

3日、モンブラン登頂その日に下山。キャンプ場に帰って夕食をアネツにごちそうする。レトルトライスと味噌汁、梅のおかし『かりかり梅』を6個も食べた。マルレーンはおなかをこわして寝ていると、アネツがゼスチャーで教えてくれた。

4日、休養日朝皆で手紙を書く。後藤、村松、中田、3人買い物に行く。この間山田、毛利オランダ娘4人で楽しい交流をした。毛利のノートを使い、絵を書いたり図を書いたり。村松通訳がいないので、生年月日の事日本語の縦書きの事など。紅茶を飲みながらお茶の飲み方日本人音を立てて飲む、オランダ人音を立てないと言われた。

1960年7月5日生アネツ
1960年3月10日生マルレーン

この日は日曜日で、オランダ娘も休日の様だ。

6日、休日シャモニ最後の日、買い物などをして暗くなってテント場に帰ってきたが、2人は芝生にローソクを立てて、まるで私を待っていたかの様だった。それから楽しい交流が始まった。後から帰った毛利、後藤、村松も加わり6人で歌を次々と歌う、アネツとマルレーンの歌、ハモッていて声もきれいだ。「ドナドナ」、「さくらさくら」など。ローソクが段々小さくなって、灯が消えるまで24時まで交流した。良い思い出ができた。

7日、今日は2人とお別れだ。短い間だったが、何処か心が通じたような気がする。別れの挨拶をして後ろを振り向かなかった。本当は振り向きたかったが。

アルプスの思い出

憧れのパイプ

村松喜美代

高校の頃から1番行きたい外国は、スイスであった。当時からハイキングは好きだったので、いつか素晴しい景色の中を歩いてみたい、と思っていた。23才の頃は、スキーが面白くて、「スイスに滑りに行きたい」等と友人と話していたものだった。

ところが結婚することになり、スイス行きの夢は消えてしまった。

私が子育てに忙しい頃、友人はスイスに行き、スキー、トレッキング、そしてマッターホルン登頂をした。その後も妹さんと行き、モンブラン（妹さんは登頂したが）に途中まで登っている。

私には無縁だと思っていたヨーロッパアルプスだったが、再び山に登れる様になり、昨年度遠征の話を聞き、「行きたい」と思った。

女性はトレッキングの様な事を言っていたので、「私もモンブランに登りたい」と1人言の様に言ってみるが、「何寝呆けてるの」という様な顔をされてしまった。

入会2年目、雪山は1年目だったから、無理もないが…。それでも、途中までもいいから、と思っていた。体力的にも、50才位になるとわからないが、今なら可能性はある。（友人は、20代に行っているが…）

家の方は、頼みの娘が中3なので、「私は受験生なのだよ。」と最初は断わられてしまいあきらめかけたが、杉山由美子さんに励まされ、再度アタック。1日中勉強している訳でない、部活もない。「お母さんの夢なんでしょ」と長男が言ってくれ、男の子も協力することで、子供達の了解は得た。

会社にも、夫にも了解してもらい、17日間も家を留守に出来る私は、本当に幸せである。絶対登ら

1ページとなった。

三島労山に入会して3年目、雪山は2年目の私がモンブランに登れたのも、雪山経験の豊富な先輩達と一緒で、安心して登れたから

た訳である。42才主婦の可能性への挑戦である。今後私達に続く人達が出てくれることを望む。そして私自身は、機会があったら、又行きたいと思う。

ら2回である。須走口からは初めて。頂上直下で、山田が迎えに来て、ザックを持ってくれたのでとても嬉しかった。

山頂で白まるのは、初めてであ

た。

3日、モンブラン登頂その日に下山。キャンプ場に帰って夕食をアネツにごちそうする。レトルトライスと味噌汁、梅のおかし『かい、と思っていた。23才の頃は、スキーが面白くて、「スイスに滑りに行きたい」等と友人と話していたものだった。

高校の頃から1番行きたい外国は、スイスであった。当時からハイキングは好きだったので、いつか素晴しい景色の中を歩いてみた

初は断わられてしまいあきらめかけたが、杉山由美子さんに励まされ、再度アタック。1日中勉強している訳でない、部活もない。「お母さんの夢なんでしょ」と長

男が言ってくれ、男の子も協力することで、子供達の了解は得た。

会社にも、夫にも了解してもらい、17日間も家を留守に出来る私は、本当に幸せである。絶対登らなければ…。

当初トレッキング隊として、他に女性2名の申しこみがあったが結局私1名となる。

イーストツアーへの申し込みをし、春山合宿に参加した。私にとって厳しかった為か、帰宅した翌日顔がむくんでしまい、慌てて内科へ。「賢う賢炎」と言われ、奈落の底に落とされた思いだった。

ヨーロッパどころか、もう山にも登れなくなってしまう。中学の時、急性賢炎で1ヶ月入院したことがある為、余り無理はしない様にして来たのだが…。心配してくれた友人の勧めで、S病院で診て戴いたところ、何ともない、とのことだった。一時的だった様で、ホッと胸をなでおろす。

マッターホルンにも登るつもりだったので、岩トレもして、富士山での高地順応トレーニングとなった。泊まりとなると荷物が多くなるので、普通の人より心拍数の多い私にとって、厳しくなる。頂上まで登ったのは、富士宮口から2回である。須走口からは初めて。頂上直下で、山田が迎えに来て、ザックを持ってくれたのでとても嬉しかった。

山頂で泊まるのは、初めてである。それぞれ心拍数を測ると、毛利64、後藤70、山田60、中田84で私は、108だった。平常は、82位。山頂にいるだけで、運動している位だから、ここより1000M高いモンブランに、果して登れるだろうか、不安になってきた。

翌朝お鉢めぐりをした。平地では、山田と同じ様に歩けるのに、3〜4歩歩いただけで、もう遅れてしまう。心臓が追いつかない。悲しいけれど、仕方ない。グーテ小屋までででも、良いとしよう。

さて、出発まであと2週間となった。何かと忙しくて英会話の勉強が出来なかったことが、気がかりだ。が、「ブロークンで大丈夫」との友の言葉を信じて、何とかなるだろう。

ヨーロッパまでは、さすがに遠い。行き帰りの飛行機の長かったこと!でも、チューリッヒに着いてから再びチューリッヒに戻るまでの2週間は、アッという間に過ぎてしまった様に思える。この2週間の体験は、私の人生の貴重な1ページとなった。

三島労山に入会して3年目、雪山は2年目の私がモンブランに登れたのも、雪山経験の豊富な先輩達と一緒で、安心して登れたからである。三島労山に入会して、本当に良かった。

会員には、隊長の58才の毛利や、50代で入会して冬山にも行く67才の垣野の様に、年令を感じさせない程、意欲のある先輩達がいる。当然私も刺激を受けるし、又、今回の私の体験は、与える方となった訳である。42才主婦の可能性への挑戦である。今後私達に続く人達が出てくれることを望む。そして私自身は、機会があったら、又行きたいと思う。

個人の力は微力でも、仲間が結集すれば、素晴しい体験が出来ることを痛感した。

隊員の皆さん、今回の遠征に参加出来なかった会員の皆さん、そして、17日間も留守をさせてくれた家族へ、「本当にありがとうございました」。

アルプスの思い出

アルプス

後藤　隆徳

アルプスはやっぱり素晴しかった。昨日の雨はあがり、光り溢れる陽光の下、ニョキニョキと巨峰群が顔を出した。永い永い間憧れつづけたアルプス。幾度夢を見たであろうアルプス。カシン、レビュファ、ポナティ。神様の様な人達がついこの間まで攀り登っていたアルプス。写真と文でしか知識のなかったアルプスに私は遂に来たのだ。

エギュー・デュ・ベルト、グランド・ジョラスはさすがに迫力がある。アッ、あれがダン・デュ・ジュアン＝鮫の歯か。なるほど、当り前だけど写真と同じだ。ウーン、ツール・ロンド。いい名前だ。北壁がカッコいい。そして何といっても盟主モン・ブラン。これは想像してたよりはるかにでかい。何だか嬉しくなってしまう。ミディ南壁。花崗岩の美しい壁だった。ヴァレ・ブランシュの衛兵のようにスクッと佇立している。

日本では経験することの出来ない「氷河」は、本当に硬い硬いガチガチの氷だった。登山を始めて26年目にしてやっと氷河を歩けた。巨大なクレバスはどこまでも深淵で、その色は海の青さにも似ていた。

……

「いつかきっと富士山より高い山に登りたい」「定年後のトレッキングなんてイヤだ。少し無理でも動けるうちに行き、絶対山登りをしたい」そんな会話を数年前から機会あるごとにしてきた。皆なもその辺までは乗ってくるが、「では、いつにする」「期間は」「どこの山」となると元気がなくなる。本当に現役のうちに海外登山＝富士山より高い山に行けるのか？毎年確実に落ちて行く体力を気にしながら自問自答は続いた。

「チャンスがあればどこでもいい。積極果敢にアタックしてみよう」と思いはじめた3年前、岡山県連が、中国天山山脈に聳える「カシカール（6347m）峰」遠征隊員を公募していた。未登の処女峰は魅力があった。期間は35日、費用は約100万円。とにかく参加するのにはと会社に休暇申請をする。ダメだろうと思っていたが、意外にも社長の「どうせそういう奴は止めても行くだろう」のツルの一声でOKになったという。が、条件があった。備考欄には「ただし今回限りとする」と書かれていた。私は諦めざるを得なかった。仮にもし唯一海外登山のチャンスを与えられるならば、やはり、今まで共に活動してきた仲間と行きたかった。そうでなければ今までの会活動は何であったか分からなくなってしまう。「よし、20周年でヨーロッパ・アルプスに行こう」私は心に決めた。

……

初めての海外登山。しかも富士山より高い山に登る。体力は、技術はどうか。言葉も十分でない。キャンプ場、長い共同生活はどうか、遠征が決定すると新しい心配が出てきた。

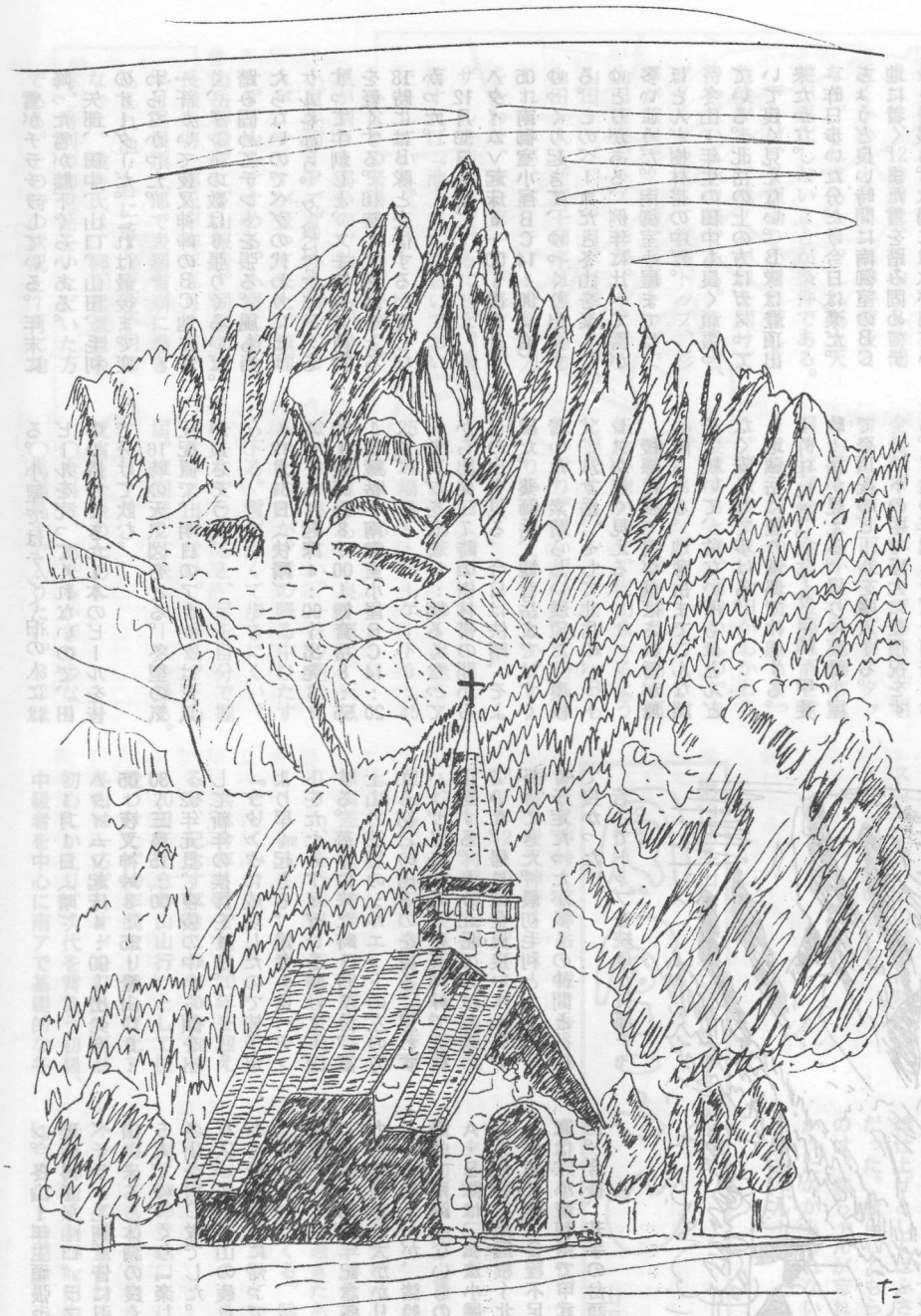
山は天候と体調が良く、一般ルートならばそれ程難しくなく、冬富士、5月の北尾根、北穂東稜をトップで務める体力、技術があれば通用する。ただし、ひとたび悪天候になれば、降雪を見るので要注意。高所登山（これは富士山より高いという意味）は思った程でなかったが、不慣れな山小屋の環境、食事など、良好な体調を維持するのが難しかった。経験がある、なしで相当違うだろう。

キャンプ生活は長期になると山以外の雑用（買出し、食事の仕度、片づけ、洗濯、入浴、外部折衝）でけっこう疲れた。山への集中力が薄れ、安全登山上も問題がある。共同生活は、労山でも全も個性的メンバーゆえ多少の覚悟はしたものの、酒の入ってのトラブルは避けたい。言いたい事はハッキリ言い、いつまでもグダグダ言わない事だ。

……

それにしても何と気高く雄大で美しい山々。天を突く針峰群。永遠の輝きを失わない氷河。咲き誇るエーデルワイスはあくまで可憐で美しい。微力だが私達はそこにちょっぴり足跡を印して来た。それは私達人生に永遠に光り輝く思い出となるだろう。

多方面に渡り援助をいただいた皆さん本当にありがとうございました。誌上を借り改めて御礼申し上げます。



た

レ・プラの礼拝堂とドリュ

B747-400

POLYBA

'91 7 31

31

ミディ針峰～プラン針峰縦走